

第三帝国のソ連征服政策と ユダヤ人迫害・大量射殺拡大過程 ——占領初期1941年6月～9月を中心に——

永 岑 三千輝

目次：

はじめに

1. 「絶滅戦争」とはなにを意味するか
2. 独ソ戦下ユダヤ人の犠牲——概観——
3. 前提——ロシア史とソ連時代のユダヤ人
4. ソ連征服戦争の準備とユダヤ人の位置づけ
5. 急速な軍後方地域拡大と治安確立課題

むすびにかえて

付図（独ソ不可侵期から独ソ戦期の地図1, 2）

はじめに

ヒトラーは対ソ奇襲攻撃バルバロッサ作戦の準備を進める中で、戦争勝利を第一に、1941年3月にはドイツと占領下ヨーロッパ諸地域からのユダヤ人移送・追放計画を中止せざるを得なくなった。ドイツと占領地のすべての可能な人的物的資源を最大限に戦争に集中的に投入するためには、ユダヤ人移送の課題は、下の方に位置づけざるを得なかった。しかし、追放計画がなくなったわけではなく、開戦近くなると短期的勝利の展望と領土・

支配領域拡大の願望のもとで追放計画が再浮上したことを見た¹。

それでは、バルバロッサ準備過程から攻撃開始直後、1941年7月末までの間に、実際にどのようなことが起きたのか。これをまず見ておく必要がある。そして、次に8月から9月にかけて、ソ連の反撃体制が強化され、第三帝国の電撃的勝利の展望がなくなってしまった状況で何が起きたかを追跡する必要がある。ソ連の電撃的圧服が不可能になり、長期戦に備えなければならなくなる時は、米英連携の強化とこれに呼応する広大な西方ドイツ占領地の治安状況の悪化や、ドイツ国内へのイギリス軍の都市爆撃が増加する。これらへの対応で、3月のユダヤ人移送ないし追放の中止からの転換、ドイツ国内と占領地域から42年春までの臨時的措置として、ユダヤ人東方移送作戦を開始する必要性に迫られ、一部強行される。これらをふまえて42年9月から12月まで、第三帝国最初の「冬の危機」を迎えるなかでのドイツ占領下全域の状態とユダヤ人の置かれた状況を見る必要がある。

1. ヒトラーの「絶滅戦争」はなにを意味するか

【絶滅戦争とは？】

ヒトラーの対ソ戦争をほかの諸戦争と対比し、また西欧における戦争との違いを特徴づける概念として、ヒルグラーバーが用いて以来の「絶滅戦争（Vernichtungskrieg）」なる表現が、国防軍の犯罪を立証しようとする資料展示とそこから喚起された論争以来、広く使われるようになっていく²。しかし、ヒトラーは『わが闘争』でもいろんな文脈で「絶滅」とか「絶滅戦争」を使っている。したがって、概念の意味合い、それが具体的に何

¹ 拙稿「第三帝国の戦争政策とユダヤ人迫害——ポーランド1939年9月～1941年6月——」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、72-1、2021。

² Hamburger Institut für Sozialforschung (Hg.) , *Verbrechen der Wehrmacht. Dimensionen des Vernichtungskrieges 1941-1944*, Ausstellungskatalog, Hamburg 2002.

を意味してるか、その内容に関しては注意が必要である。たとえば、『わが闘争』第2巻第13章の「日本とユダヤ人」では、イギリスのユダヤ人新聞が、日本に対する戦争を諸民族に扇動し、「民主主義の宣言と日本軍国主義・天皇制の打倒の関の声で絶滅戦争を準備している」などと³。これは反ユダヤ主義の文脈である。この場合の「絶滅戦争」とは何を意味するのであろうか。

【「世界観戦争」と「絶滅戦争」はどう関係するのか】

最近の大木毅の独ソ戦に関する啓蒙書⁴は非常に多くの読者を得ているようである。そもそも、独ソ戦期に関して日本の研究者が独自に史料にあたって研究し、それを論文化し書籍にまとめるということが、管見によれば、これまでまったくと言っていいほど見られなかった⁵。この大きな欠落を啓蒙書という形態であれ埋めたという意義は大きい。それが、社会の同書大量的受容の原因であらう。第二次世界大戦のある意味では最大の歴史的事件なのに、独ソ戦期については欧米の研究や啓蒙書の翻訳に頼ってきたのが、これまでの実態であらう。独ソ戦期に関する研究という点で数少ない例外が、芝健介と小野寺拓也の仕事であらう。

そうした研究史の状況で大木が軍事史の観点からとはいえ開拓的な鋤をいれた貢献を高く評価したい。欧米での研究蓄積を簡明に整理して、ナチ

³ Hitler, *Mein Kampf*, Eine kritische Edition, hrsg. v. Christian Hartmann, Thomas Vordermayer, Othmar Plöckinger, Roman Töppel, München-Berlin 2016, S. 1621.

⁴ 大木毅『独ソ戦——絶滅戦争の惨禍——』（岩波新書、2019）。

⁵ 芝健介『武装親衛隊とジェノサイド』（有志舎、2008）、小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」——第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』（山川出版社、2012）。これに先立っては、拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941 - 1942』（同文館、1994）、『独ソ戦とホロコースト』（日本経済評論社、2001）、『ホロコーストの力学——独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法』（青木書店、2003）、これら書籍のもととなる拙稿諸論文。管見の限り、わが国では独ソ戦期に関する実証研究は極めて少ないのが現状であらう。

ス・ドイツの戦争への道についても、大筋の流れがつかめる。本書によって、欧米の研究史では国防軍の神話を暴く「国防軍犯罪展」をめぐる論争で問題となった「絶滅戦争」なるものの様相がわが国でもかなり知られることになった。

しかし、「絶滅戦争」とはなにをどうすることなのか？

大木は、独ソ戦の史上最大の惨禍をもたらしたのは何かと問い、「総統アドルフ・ヒトラー以下、ドイツ側の指導部が、対ソ戦を、人種的に優れたゲルマン民族が『劣等人種』スラヴ人を奴隷化するための戦争、ナチズムと「ユダヤ的ボルシェヴィズム」との闘争と規定したことが、重要な動因であった」という。しかし、次の文章には、飛躍がある。彼らは、独ソ戦を「世界観戦争」であるとみなし、その遂行は仮借なきものでなければならぬとしたからだ。その証拠として、1941年3月30日のドイツ国防軍高級将校たちを前にした演説を引用している⁶。その結論として、「ヒトラーにとって、世界観戦争とは、『みな殺しの闘争』、すなわち、絶滅戦争に他ならなかった」とする⁷。

読者は、「世界観戦争」と「みな殺し」、「絶滅」とが、この文脈でどのように、どうして結びつくのかわかるであろうか。そうした直結の仕方は、提示している史料の読み方、ヒトラー・ナチ国家指導部の考え方の把握において問題があると思われる。その背後には、独ソ戦、ひいてはソ連に対する理解の問題、ソ連を制圧しようとしたヒトラー・ナチ国家指導部に關するゆがんだ理解があると思われる。

ヒトラーの発言を丁寧に読めば、対象無限定の「みな殺し」などを主張してはいない。ヒトラー発言のそのような読み方は、ヒトラーの「狂人視」⁸

⁶ Aufzeichnung von Hermann Hoth über Hitlrs Ansprache vor Generälen der Wehrmacht a. 30. 3. 1941 in der Reichskanzlei, Dok.2, VEJ, 7, S.117-119.

⁷ 大木 (2019)、iv-v.

⁸ エバーハルト・イェツケル『ヒトラーの世界観——支配の思想——』（滝田毅訳、南窓社、1991）、日本語版序文、1。

とでもいうべきものである。

彼において「みな殺し」の対象は、この時点の言説において極めて具体的である。それは、「反社会的犯罪者に等しいボリシェヴィズム」である。「未来への途方もない脅威」となる共産主義、「ユダヤ的ボルシェヴィズム」、その担い手・共産主義者である。こうした世界観の指導者と組織がソ連の国家を握っている、ロシア・ソ連を支配しているのであって、それを除去してしまえば、スラヴ人を奴隷化できるという論理的関連になっている。逆に、共産主義者を「みな殺し」にしておかなければ、「30年以内に再び共産主義という敵と対峙することになる」と。すなわち、世界観としてのヒトラー・ナチズムの核心をなすのは、敵である「ユダヤ的ボルシェヴィズム」とその担い手の殲滅であった。そして、そのことによって他民族の奴隷化を実現することであった。

ヒトラー・ナチズム・第三帝国の東方征服地におけるスラヴ系大衆の奴隷化という点に限って言えば、80年代後半の歴史家論争⁹の火付け人 Nolte がすでに正確に指摘していた。すなわち、彼によれば、第二次世界大戦におけるドイツの戦争指導が三段階に分かれ、第一段階、ヴェルサイユ体制以前の旧ドイツ領およびハプスブルク帝国内のドイツ地域の「再編入」のための「国民的戦争」、第二段階、敵の軍事的制圧のための「伝統的様式」での「ヨーロッパの通常戦争」、そして第三段階が、ヒトラーに「固有の」、「人種イデオロギーに基づく征服・絶滅戦争」であるとしている。この戦争では、他国領土の軍事的な占領は当地のそれまでの「指導層の根絶」と占領地大衆への大打撃と奴隷化を意味したと¹⁰。このように根絶対

⁹ これについては、ヴォルフガング・ヴィッパーマン『誰の罪か——歴史家論争からゴールドハーゲン論争へ』（増谷英樹編日暮美奈子・岡葉子・坂本美どり・和多田徹哉・山本達夫訳、東京外国語大学海外事情研究所、研究報告131、1998）参照。

¹⁰ E. Nolte, *Der Faschismus in seiner Epoche*, München 1963, S. 436, z. n. Andreas Hillgruber, *Hitlers Strategie. Politik und Kriegführung 1940-1941*, Frankfurt a. M. 1965 (1982), S.516.

象を限定するのは、ヒトラーの考えと行動を正確に把握しているといえる。

しかし、注意を要するのは次の点である。ここでは、ポーランドとソ連に共通のこと、すなわち、「指導者層の根絶」ということしか指摘されていないのである。だが、ポーランドとソ連とでは、明確に「指導者層」の内実・政治的性格が違うのであって、ヒトラーはその違いを明確に認識し規定していた。ソ連の場合は、「ユダヤ的ボルシェヴィズム」、共産主義者がヒトラーによる根絶ないし絶滅の対象である。ノルテが、ヒトラーの明確に限定している対象に言及しないところに、冷戦期西側イデオロギーに依拠していることがわかる。後年の歴史家論争で、スターリン体制をヒトラー体制に先行する犯罪体制と規定するノルテの立場が、すでにここでも露呈しているといえよう。そのノルテの立場は、ヒトラーがスターリンよりも先に攻撃作戦を確定していたこと、第三帝国の先制攻撃・攻撃戦争・侵略戦争だったことをカムフラージュすることになっている。また、ソ連攻撃に先立って、どのように対象限定を行ったかに注目しないことで、ヒトラー狂人視に与し、スターリンのドイツに対する先制攻撃論（ドイツ防衛戦争の議論）に譲歩する態度を表明しているといわなければならない。

ヒトラー・第三帝国がポーランドを攻撃した際にも、すでにみたように、ポーランド国家の担い手・指導者層・知識階級が殲滅ターゲットであった。それによって、ポーランド人大衆を労働奴隷化する、という目標が実現するとみているのである。ポーランドとロシア・ソ連との違いは何か。ポーランド共和国は、百数十年にわたり隣接強国（ロシア・ツァーリズム、プロイセン・ドイツ、オーストリア・ハプスブルク）による分割支配を受け、民族の統一と独立のナショナリズムは長く抑圧されてきた。

ポーランドにおける分割支配・抑圧から解放のナショナリズムとエネルギーは、第一次大戦による折衝列強の支援のもとではじめて独立と統一を実現できた。そのポーランド・ナショナリズム、新生共和国の強い国家主義は明確であった。

しかも、ポーランドにも反ユダヤ主義に長い伝統があった。ユダヤ人追

放の主張にも強いものがあつた。したがって、ヒトラー第三帝国がポーランドを支配するには、一方で、強固なポーランドの民族主義・ナショナリズム、その担い手・指導者層を殲滅のターゲットにし、他方で、社会のすそ野に広がり危機の中で急進化していた反ユダヤ主義——マイノリティ・ユダヤ人を迫害・追放する政策方向——を、ナチス・ドイツの占領支配の武器として、すなわち二つのベクトルと圧力を重ね合わせて支配体制構築に使うことが可能であり、それを実践した。

これと違って、ロシア・ソ連の場合は、ヒトラー・ナチスがユダヤ＝ボルシェヴィズムとしてユダヤ人とボルシェヴィキとを一体化してとらえることにより、最初からユダヤ人に対する攻撃は、国家を握りヒトラー・第三帝国の侵略に抵抗・反撃するボルシェヴィズム、共産主義者に対する攻撃と緊密に結びついていたのである¹¹。スターリン体制からの反撃(正規軍とゲリラ・パルチザン、その支援者・支持基盤)の強大化に応じて、ユダヤ人殺戮へのベクトルが苛烈化するという連関になっている¹²。

¹¹ ドイツにおける権力確立も同じ道筋で行われた。周知のように、ヒトラー・ナチ党が1933年1月の政権掌握から半年ほどで一党独裁体制を構築していく際に、国会炎上事件を格好のチャンスとして瞬時に共産党の非合法化を行い、共産主義者を逮捕投獄して強制収容所におち込み、社会民主党その他の諸政党を解党に追い込んでいく手順が、それである。続いて、あるいはそれに密接に関連して、ユダヤ人迫害の直接行動が大々的に行われる。犯人とされたコミンテルンのデミトロフ(ブルガリア人)のアリバイと裁判闘争による無罪釈放(犯人とされた他の3人、ブルガリア人のポポフ、タネフ、ドイツ共産党国会議員団団長ドルグレーを含む全員無罪)については、デミトロフ選集編集委員会編訳『デミトロフ選集』第2巻(大月書店、1972)、1-64。現場にいた放火自供のヴァン・デア・リュッベの単独犯かナチス(ゲシュタポ)の結託による陰謀かをめぐる論争史と最新の到達点は、Benjamin Carter Hett, *Der Reichstagsbrand. Wiederaufnahme eines Verfahrens*, Reinbek bei Hamburg 2016。学術的には、否定しようもない確実なことはナチ党が放火事件発生を共産党弾圧・ワイマール憲法停止に最大限に利用したことだ、と。

¹² ソ連ユダヤ人に対する徹底した殺戮作戦の様相は、芝(有志舎、2008)に詳しい。

【「ユダヤ人絶滅政策」の概念を無限定に使えるか】

「絶滅戦争」の概念と同様に、ヒトラー・ナチスの「ユダヤ人絶滅政策」というこれまた非常に広く用いられる概念も、その意味内容に関しては、精査と限定が必要に思われる。

そもそも、ヒトラー・ナチスに最初から「ユダヤ人絶滅政策」はあったのか。この概念は、600万人とされるユダヤ人の犠牲を第二次世界大戦終結戦後に知ったことから、すなわち、悲劇の規模と結果を知った上での概念ではないか。それは、ヒトラー・ナチスの民族帝国主義・人種主義の帝国主義の戦争政策が敗退する過程で引き起こしたユダヤ人迫害・殺戮を累積した結果から振り返ってみると、あたかも「ユダヤ人絶滅政策」が初めからあったように見えるだけではないか¹³。この結果を戦後知ったうえで、最初から意図され計画・構想されたという想定のもとに、編み出された概念ではないか¹⁴。すなわち、結果から出発して、最初の意図・計画を想定する発想ではないか。これはいわゆる意図派の見方である。

しかし、「ユダヤ人絶滅政策」という概念を使用する歴史研究は、主観的意図は別として、すなわち自らは意図派ではなく機能派だと考えているとしても、また研究史整理において「機能派が勝利した」とのスタンスをとっている栗原の場合も、実際には意図派の概念に、したがって意図派の歴史解釈に譲歩している不徹底さがあるのではないか。それが「ヒトラー絶滅命令」をめぐる論争において、41年7月末—8月初旬説をとる見方、

¹³ 「ユダヤ人絶滅という目標を当然のこととして前提にしている」（訳者解説、下、422）とされる「古典的名著」。ラウル・ヒルバーク『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』上・下（望田幸男・原田一美・井上茂子訳、柏書房、1997）。

¹⁴ 意図派の代表の一人イエツケルは、ヒトラーが「1920年代に既に、後年遂行したことの基本的構想を計画していた」とし、「なかでも、領土の征服とユダヤ人の除去という、彼の二つの目標は明確に計画されていた」と。イエツケル（1991）、日本語版序文。この見方を否定するのが、機能派である。600万の殺戮という結果に終わった「ユダヤ人の除去」を、機能派の研究者は、ドイツ内外の政治的・経済的・軍事的・心理的等諸要因の組み合わせさせた作用・働きの結果とみる。

移送政策から絶滅政策への転換の時期を実際（過渡期41年9月～12月、そして転換41年12月）よりも早くに見ることにつながったのではないか。独ソ戦後方地域のソ連・ユダヤ人殺戮の過激化と全ヨーロッパ的規模でのユダヤ人殺戮作戦への変化とを同一視してしまったのではないか¹⁵。

概説書として定評のある芝健介『ホロコースト——ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』（中公新書、2008）は、全体を貫く副題として、ユダヤ人大量殺戮を用いており、無限定の「絶滅政策」という概念を用いていない。この点では、「ヒトラー絶滅命令」をめぐる論争（移送政策から絶滅政策への大転換をめぐる欧米と我が国での論争）を踏まえているといえる。その見地は、41年7月末から8月初旬に大々的な（ヨーロッパ・ユダヤ人に対する）ヒトラーの絶滅命令があったとする議論に距離を置き、機能派の観点を貫いているとみられる¹⁶。41年7月末から8月初旬の「年齢や性の差異による無差別なユダヤ人ジェノサイドとしてホロコーストの本格的始動」を「ソ連ユダヤ人の絶滅」と限定しており¹⁷、この点、無差別

¹⁵ 栗原優『ナチズムとユダヤ人絶滅政策——ホロコーストの起源と実体——』（ミネルヴァ書房、1997）。栗原と私は機能派である。だが、その「機能」、諸要因とその組み合わせをどう把握するかで、「ヒトラー絶滅命令」発令時期（文字通りの絶滅政策への転換の時期）をめぐって、欧米の研究史と同様日本でも、1941年8月説（栗原）と12月説（永岑）の違いがある。

¹⁶ 大木（2019）は、欧米と日本の論争史を無視し、1941年7月31日のゲーリング令をもって、ハイドリヒを「絶滅政策の総責任者にした」（108-109）と断じている。ヨーロッパ・ユダヤ人問題の全体的解決のため中央諸官庁と準備を進めるようにとの命令（準備命令であり、可能性としてはなお移送政策が現実的に存在した、ソ連占領地への移送の可能性を否定することは独ソ戦の敗退を意味する）を、41年12月からヴァンゼー会議での大々の転換を生み出す独ソ戦の泥沼化と世界大戦への転換を契機とし条件とする絶滅政策・絶滅作戦への転換に直結させている。ここでも、41年12月以降の結果を知った上での先取りの推定となっている。

¹⁷ 芝健介『武装親衛隊とジェノサイド——暴力装置のメタモルフォーゼ』（有志舎、2008）、111。ソ連ユダヤ人に対する親衛隊・警察部隊（アインザッツグルッペ）と武装親衛隊とのかかわりの時系列を負った詳細な現場の叙述は、迫力と説得力がある。

化の時期に関して私の見地と同じである。

しかし、ヨーロッパ・ユダヤ人の移送政策から絶滅政策への大々の転換点をいつとみるかに関しては、すなわちポーランド総督府における「絶滅収容所」建設とそこにおける大量殺戮の実行（ただし外面的対外的な用語としては「移送」「疎開」が使われて、移送ユダヤ人のごく一部の労働投入も行われる）への転換点をいつとみるか、その論理と力学に関しては、拙稿のスタンスとの間に違いがある。転換点を41年12月とみる筆者の見方と違っている¹⁸。すなわち、「1942年以降、独ソ戦が混迷を深めていくと、今度はユダヤ系ポーランド人の殺戮が日程にのぼってくる」（まえがき、iii）ととらえているからである。そもそも、42年以降、「独ソ戦は混迷を深めたのであろうか。41年12月と42年1月1日の26か国連合国結成は、枢軸と連合国の対決という基本をはっきりさせたのではなからうか。まさに、ヒ

¹⁸ 拙著（1994）の見地をヒムラー幕僚部やハイドリヒの^{ライヒ}帝国保安本部の史料探索、ゲルラッハなどの新しい研究成果を踏まえてまとめた拙著（2001）の立場。Christian Gerlach, *Die Wannsee-Konferenz, das Schicksal der deutschen Juden und Hitlers politische grundsatzentscheidung, alle Juden Europas zu ermorden*, in: ders., *Krieg, Ernährung, Völkermord. Forschungen zur deutschen Vernichtungspolitik im Zweiten Weltkrieg*, Hamburg 1998, S.85-166. 大々の絶滅政策への転換後、1942年の独ソ戦におけるドイツの大攻勢の準備過程とそこでの窮状が、アメリカ参戦に伴う重圧と相まって、絶滅政策に拍車をかけることになる。Peter Longerich, *Politik der Vernichtung. Eine Gesamtdarstellung der nationalsozialistischen Judenverfolgung*, München-Zürich 1998, S. 585-586. 第三帝国が、軍事情勢の起死回生の手段としての原爆の開発を断念せざるを得なかったのも、この人的物的諸資源の窮迫状態と関連していた。Manfred Messerschmidt, *Die Wehrmacht: Von Realitätsverlust zum Selbstbetrug*, in: Hans-Erich Volkmann (hrsg.), *Ende des Dritten Reiches - Ende des Zweiten Weltkriegs. Eine perspektivische Rückschau*, München 1995, S.223f. 拙稿「ナチス・ドイツと原爆開発」『横浜市立大学論叢』人文科学系列、60-1, 同「ハイゼンベルクと原爆開発」同、社会科学系列、60-2・3, 同「ハイゼンベルク・春ナック演説の歴史的意义——ホロコーストの力学との関連で」同、人文科学系列、61-1, 同「ホロコーストの力学と原爆開発」横井勝彦・小野塚知二編『軍拡と武器移転の世界史』（日本経済評論社、2012）第8章。

トラーが39年1月の国会演説以来、40年1月30日の国会演説、41年の国会演説で「予言」してきたことが、現実になった、すなわち「世界戦争に突入したならば、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅だ」といった枠組みが現実になったことを意味しないであろうか。しかも、41年12月の独ソ戦の前線は、そのソ連軍の反撃の高まりにより後退に後退を重ね、それに伴いドイツ軍占領地が縮小していくというベクトルの方向性は一貫していたのではないか。

したがって、ポーランド・ユダヤ人の運命（大量殺戮という方向性）が42年以降にやっと「日程にのぼる」のではない。ヒトラー・第三帝国は独ソ戦前線での被害増大に加え、41年6月から12月の広大なソ連占領地域の平定に困難を極め、ソ連占領地への臨時的移送政策さえ不可能となるなかで、12月初旬、世界大戦に宣戦布告（12月11日）して突入したこと、ヒトラーの12月12日党幹部に対する演説、12月中旬総督府閣議での総督フランクの発言、42年ヴァンゼー会議における総督府次官ビューラーの発言、その会議録への明確な記述、42年1月30日のヒトラー国会演説などからみて¹⁹、対米宣戦布告による世界戦争への公然たる転換の41年12月が大量殺戮への転換点（絶滅収容所ベウゼッツ、トレ布林カ、ソビボールの建設によるポーランド・ユダヤ人2百万の殺戮）であるとみるのが、前掲拙著3冊の立場である。42年の一年はその強行的推進で一貫している²⁰。

¹⁹ 拙著（2003）を参照されたい。機能派の先駆的研究として、「古典的」（増谷英樹）と称されるのが、Uwe Adam, *Judenpolitik im Dritten Reich*, Düsseldorf 1972（ウーヴェ・D・アダム『第三帝国のユダヤ人政策』増谷英樹監訳山本達夫訳、東京外国語大学海外事情研究所・研究報告127、1998）。「絶滅政策」（絶滅収容所への連行と毒ガスによる大量殺害）への転換をアダムは41年12月とみている。しかし、ヒトラーの「決定」を41年9月から11月とみる（Ebd., S.311-312）のは、転換への移行過程と「決定」を同一視するものである。12月対米宣戦布告を契機とする転換説からすれば、9月から12月は移行期に過ぎない。ヴァンゼー会議の当初招集日（12月9日）、延期後の再招集（1月8日）という事実とも整合しない。

²⁰ なお、この間、拙稿で紹介している最新の16巻本史料集のタイトルは、「ヨーロッパ・ユダヤ人の迫害（Verfolgung）と殺戮（Ermordung）」であり、無限定の「絶滅政策」という概念は使用していない。

ヒトラー・ナチズムの世界観、イデオロギー、そこにおける基本的諸要求の重要性を無視していいというのではない。いやむしろ、ヒトラー・ナチズムの思想構造はきちんと把握しておくべきだという見地である²¹。その上で、その思想構造を持つ人間たちが現実政治の舞台で機能を発揮するドイツ内外の状況、その諸要因の作用・機能を追跡していく必要があるというに過ぎない。しかも、それを全体的動態的な世界的関連——世界大戦突入と総力戦の泥沼——において、見ていくべきだという方法的立場である²²。

2. 独ソ戦下ユダヤ人の犠牲——概観——

【捕虜、餓死、病死】

ソ連に対する奇襲攻撃は1941年6月22日朝、始まった。ドイツ大軍350万による赤軍450万の撃滅こそは、ヒトラーの第一の課題であった。1千万人近い兵士の激突がもたらす犠牲は、想像を絶する規模にのぼった。12月11日、ヒトラーは対米宣戦布告国会演説でドイツ側の犠牲にも言及した。ドイツの戦死者16万余、負傷者57万余、行方不明3万3千余と。しかし、彼が強調したのは、ソ連軍に対する攻撃の大々の戦果であった。戦時捕虜だけで12月1日までに380万余を手に入れたと²³。ヒムラーと親衛隊の管理下に移された戦時捕虜の大群はどうなったのか。東部占領地域相ローゼンベルクのカイテル宛書簡によれば、42年2月時点で、「360万人のうち

²¹ 筆者なりのその試みは、拙稿「第三帝国の『国家と経済』——ヒトラーの思想構造そくして——」遠藤輝明編『国家と経済——フランス・ディリジズムの研究——』（東京大学出版会、1982）、VIII章。

²² その方法的見地を明確にしようとするキーワードが、比喩的ではあるが「力学」と闘いの「弁証法」である。拙著（2003）。この見地は、一部に誤解があるが、ヒトラーの思想構造だけを見て（すなわちヒトラー中心主義の見地で）ナチス体制理解の問題が解決するという立場でないことは言うまでもない。

²³ Domarus（1973）, S. 1799-1800.

労働可能なものは数十万にすぎず、大部分が、餓死、ないし悪天候による衰弱死。さらに何万人かはチフスにも」と²⁴。数か月でソ連を制圧するというバルバロッサの傲慢な計画では、捕虜への食糧供給・宿泊などまったく考慮外であった。それどころか、捕虜収容所付近の住民が食料を提供しようとしても、収容所司令官はそれを禁止し、むしろ餓死するに任せた。連行中も、周辺住民が食料を与えようとするのを許さなかった。雨や雪が降っても、野外に放置した²⁵。

【「抑圧者」ユダヤ-ボルシェヴィストの除去とユダヤ人大衆の抹殺】

しかし、対ソ戦はたんに「武器の戦い以上のもの」であった。戦争を終結させるためには、広大な空間で「敵の国防軍を打破するだけでは不十分」であった。ユダヤ-ボルシェヴィストのインテリ階級は人民のこれまでの「抑圧者として除去」されなければならなかった。ブルジョアの貴族的旧インテリ階級も、亡命者として存続している限り、同様に排除されなければならなかった²⁶。

【少なくともユダヤ人250万人の犠牲】

占領下ソ連の「ほとんどすべての人」に暴力が向けられた。しかし、以上みたような文脈・イデオロギーからして、ドイツ占領者が「ユダヤ人ほど体系的かつ無慈悲に迫害した住民グループはいなかった」とされる事態は必然であった。ドイツ指導部は、攻撃開始の数か月前から「ユダヤ-ボルシェヴィスト指導部」の殺害を準備し、1941年6月の進駐開始直後からユダヤ人大衆を差別して貶め、諸権利を剥奪し、財産を略奪し、最後には

²⁴ Brief Rosenbergs an Keitel vom 28. 2. 1942, PS-081, *Der Prozess gegen die Hauptkriegsverbrecher vor dem Internationalen Militärgerichtshof, Nürnberg* 14. 11. 1945 -1. 10. 1946 (IMG), Bd.25, S. 157f.

²⁵ Ebd., S. 158.

²⁶ Kriegstgebuch des Oberkommandos der Wehrmacht (OKW) vom 3. 3. 1941, *Verbrechen der Wehrmacht* (2002), S. 42.

親衛隊警察の特別出動部隊（アインザッツグルッペEinsatzgruppe）が国防軍の一部や地域の支援者の援助を得てしだいに全面的に殺害作戦を展開していった。ユダヤ人大衆の殺戮の最初の大きな波は、急速に進撃する国防軍の後について展開した特別出動部隊によるもので、前線背後においてだった。最初は、ユダヤ人の指導者層、それからすべてのユダヤ人男性を、さらに前線が東部深くに入り込むに従い8月から10月にはテロルから民族殺戮²⁷への、すべての夫人や子供を含めた全ユダヤ人共同体の殺戮への決定的な一步を踏み出した。この最初の殺戮の大波は、軍政下の地域においても、すでに民政統治下におかれていたバルト諸国にも、さらにはルーマニアが占領していたウクライナのオデッサなどの地域（トランスニストリア）にも押し寄せた²⁸。

ドイツ軍進駐最初の半年だけで、ドイツ軍政下におかれた白ロシア、ロシア、ウクライナで50万以上のユダヤ人が犠牲になった。同時に、国防軍が管理下に置かれた何万かのユダヤ人戦時捕虜の殺害を実行した。1942年夏、ドイツ軍と親衛隊警察の殺戮部隊アインザッツグルッペがスターリングラードと北コーカサスに進撃するとき、さらに約5万人のユダヤ人を犠牲にした。バルト諸国では占領者とその現地協力者が42年初めまでに約23万人のユダヤ人を殺害した。この時点でリトアニアに約4万4千人、ラトヴィアにぎりぎり7千人が生きていたが、エストニアには一名もいなかった。リトアニアとラトヴィアのほとんどのユダヤ人も、親衛隊が43年秋に

²⁷ ヨーロッパ・ユダヤ人殺戮への大々の転換をめぐる論争との関係で一言すれば、ここではあくまでも独ソ戦渦中、ソ連ユダヤ人の無差別殺戮への飛躍であって、ここから直ちにヨーロッパ・ユダヤ人殺戮政策への飛躍を語ることはできない。それは、この時点でヒトラー第三帝国の敗退を想定することになり、ユダヤ人の東方への移送可能性を否定することになるからである。独ソ戦中の過渡的臨時的な（42年春までの）東方への移送政策の開始は、9月からである。拙著（2003）参照。

²⁸ VEJ, 7, S. 13. VEJ, 8が取り扱う白ロシア（ベラルーシ、Weißruthenien）とウクライナにおける第二波は別の機会を待ちたい。

ゲッターを解体し始めると殺害された²⁹。

戦時中全体で、バルト諸国では少なくとも27万人、白ロシアで約50万人、ウクライナで約150万人（そのうち57万人は1941年8月から総督府に編入された東ガリツィアのユダヤ人）、ロシアで約8万人のユダヤ人が犠牲となった。ベッサラビアと北ブコヴィナの10万4千人以上のユダヤ人も犠牲となった。すべてを合わせると、41年6月22日にソ連領内で生活していたか占領された東部地域に連行された少なくとも250万のユダヤ人が犠牲となった³⁰。

3. 前提——ロシア史とソ連時代のユダヤ人

【ロシア史のユダヤ人】

ツァーリズムが18世紀にポーランド分割によって領土を西方に広げたと
き以来、ロシア帝国内にユダヤ人住民が増え、1897年の国勢調査によれば
当時総数520万人のユダヤ人の94%は、かつてはポーランド領に属してい
た地域に住んでいた。19世紀前半の改革の時代、豊かなユダヤ人がモスク
ワやベテルスブルクに住むことを許された。しかし、改革派ツァーリは、
革命的潮流に対する恐怖から自由主義的諸措置を撤回し、91年から92年
には何千人ものユダヤ人手工業者がモスクワとベテルスブルクから追放さ
れた。98年にロシア帝国のなかでユダヤ人の平均20%が救貧制度に依存し
ていた。リトアニアの首都ヴィルナ（ヴィルニユス）では救貧制度依存者の
割合が37%にも達していた³¹。

たくさんのユダヤ人が貧しく、1900年頃彼らの約60%が機械制大工業以
前の伝統的な手工業や小売り商を営んでいたという事情は、ロシアの反ユ
ダヤ主義者たちが資本主義的世俗的な近代化を伝統的なロシア社会に対す

²⁹ VEJ, 7, S. 14.

³⁰ Ebd.

³¹ VEJ, 7, S. 15.

る「ユダヤの危険」と描き出すことを妨げなかった。「ロシアで不断にわれわれの伝統的共同体構造を剥奪するブルジョア的構造のもとでは、ユダヤ人が主人になりうる」などと³²。

ポグロム、差別の継続、経済的停滞などにより、たくさんのユダヤ人が西方へ、特にUSAに移住した。1880年から1914年に約300万のユダヤ人がロシア帝国を後にした。他の多くものは中部ロシアの諸大都市へ——違法ではあったが黙認されて——移り住んだ³³。

【第一次世界大戦からスターリン体制下のユダヤ人】

第一次大戦がはじまると、ロシア帝国指導部で反ユダヤ主義者が優勢になった。彼らは、ユダヤ人を外国列強の「潜在的スパイ」と見なした。中欧諸国が1915年ロシア軍への攻撃を開始したとき、ツァーリズム官憲は約50万人のユダヤ人を「容認できない分子」として西部地域から東方へ追放した。それに反して、17年の2月革命でロシア帝国のユダヤ人には新しい時代が到来した。すでに17年3月には臨時ケレンスキー政府はすべての反ユダヤ的指令（その数は約140にも達していた）を破棄した。それによって、ロシア帝国のユダヤ人ははじめて完全に同権の市民になった。けれどもボルシェヴィキの権力掌握後に勃発し21年まで続いたロシアの内戦では革命反革命の闘いの狭間に巻き込まれた。20年のポーランドとソ連の戦争でも、たくさんのユダヤ人が犠牲になった。解放の夢は、暴力の悪夢に変わった。反ボルシェヴィキの部隊、あるいはポーランドの部隊や農民軍が引き起こした何百ものポグロムや殺戮で、約5万人のユダヤ人が死んだ³⁴。

この状況でたくさんのユダヤ人が、反ユダヤ主義との闘いを旗に掲げるボルシェヴィキに希望を託すようになった。反ユダヤ主義者は、そこにユダヤ人が特に Kommunismus に親和性があるという証拠を見て取り、ボルシェ

³² Ebd.

³³ Ebd., S. 16.

³⁴ Ebd., S.16-17.

ヴィキ指導層に占めるユダヤ人の割合をあげつらうようになった。事実、すでに1900年以前に労働者知識人の同化したユダヤ人は差別からの解放闘争の支持者を求めて労働運動に接近した。1897年創立のリトアニア、ポーランド、ロシアの全労働者同盟（略称ブント）は、何年間かロシア社会民主主義の組織的バックボーンとなった。労働運動が分裂したとき、若干のユダヤ人活動家はボルシェヴィキ党にも参加した。しかしながら、1922年、党员2万4千人のなかでユダヤ人は958人——4%——に過ぎなかった。39年でも党や国家のエリートに属するものは、ソ連の国勢調査によれば、ユダヤ人就業者のわずかに0.7%に過ぎなかった³⁵。

それに対して、ユダヤ人住民の圧倒的多数は、「革命の敗者」であった。特に、正統派ユダヤ人、小商人・手工業者は Kommunismus の新しい人間の理想的イメージには適合しなかった。ボリシェヴィキが1928年の穀物調達危機と飢餓の責任を投機者なるものに帰したとき、たくさんのユダヤ人商人が階級敵なるものとして国家的追跡者に狙いを定められた³⁶。ソ連史において27 - 28年の冬はネップの一般的危機を告げる「穀物危機」であり、「第二革命」とも称される農業生産構造の「集団化」にむけての大転換への時期であって、ユダヤ人商人の投機的活動があったとしても、それは社会の単なる部分的周縁的現象であるにすぎなかった。広大な遅れた農村を抱え周囲の諸国家諸民族と対峙しつつ急速な工業化を達成しようとするソ連の

³⁵ Ebd., S.17.

³⁶ Ebd.

全社会的要因こそが危機の根底ないし背景にあった³⁷。しかし、その複雑多岐にわたるスターリン支配下ソ連社会の問題群を単純化し、穀物調達危機やそれに伴う投機の「罪」が、マイノリティ・ユダヤ人に還元され押し付けられたわけである。これがソ連における反ユダヤ主義のイデオロギー的回路であった。

ボルシェヴィキの民族・宗教政策も、ソ連のほかの民族的宗教的マイノリティに対すると同様、ユダヤ人に対しても両義的であった。ボルシェヴィキはさしあたり、諸民族の「民族自決」への前進を支持し、部分的には最初そのイニシアティブをとった。しかし、「民族自決」の要求はまもなく危険な民族主義的反動の潜在的避難所と見なされた。ボルシェヴィキは、宗教から切断されたユダヤ人アイデンティティを創出しようとした。したがって一方では彼らはイディッシュ語の文学雑誌を支援し、国立ユダヤ劇場を創設した。しかし他方では、たくさんのシナゴグを閉鎖した。事実、1917年には大幅に隔離されていたユダヤ人共同体が、両大戦間に決定的に世俗化プロセスに巻き込まれ、広範にソヴィエト社会に統合された。特に若くて教育の行き届いたユダヤ人は20年以降、大都市に流れ込み、39年初めには全ソ連ユダヤ人の約三分の一は、5つの大都市（キエフ、ハリコフ、

³⁷ モシエ・レヴィン『ロシア農民とソヴェト権力——集団化の研究1928—1930』（荒田洋訳、未来社、1972）、溪内謙『スターリン政治体制の成立 第一部——農村における危機——岩波書店、1970）、Z. A. メドヴェージェフ『ソヴィエト農業1917—1991——集団化と農工複合の帰結——』（佐々木洋訳、北海道大学図書刊行会、1995）、奥田央『コルホーズの成立過程——ロシアにおける共同体の終焉』（岩波書店、1990）、同『ヴォルガの革命——スターリン統治下の農村——』（岩波書店、1996）。その帰結として、ヒトラー第三帝国の罪を相対化する見地（冷戦対抗史観）からは「ヒトラーのホロコーストを上回るスターリンのウクライナ農民大虐殺」と規定されるような事態が発生した。ロバート・コンクレスト『悲しみの収穫——ウクライナ大飢饉——スターリンの農業集団化と飢饉テロ——』（白石治朗訳、恵雅堂出版、2007）。富田武『スターリニズムの統治構造』（岩波書店、1996）、中島毅『テクノクラートと革命権力——ソヴィエト技術政策史1917 - 1929——』（岩波書店、1999）、野部公一・崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』（日本経済評論社、2012）。

オデッサ、レニングラード、モスクワ)で生活していた。元々の定住地域の伝統的なシュテートゥル(集住地区)でも多くのユダヤ人が出自との文化的結びつきを解消した。当時、ロシアのユダヤ人のわずかに26.4%しか、イディッシュ語を母語として挙げなかった³⁸。

だがスターリン取り巻きのボルシェヴィキ指導部は、民族的アイデンティティと社会主義的アイデンティティを同時に創出するという彼らの実験が、ユダヤ人の場合にも失敗したと見て取った。1937年、ソ連の独裁者とその追従者が至る所に敵の存在を確信すると、ボルシェヴィキはユダヤ人のたくさんの施設を閉鎖し、ロシア語の施設に転換した。ほとんどのユダヤ教の学識者が逮捕された。第二次大戦が始まる前の何年か、ユダヤ人はポーランド人やドイツ人と並んでソ連の独裁者が特別の不信感をもって迫害するマイノリティとなった。その政策の反ユダヤ的諸特徴は、「粛清」が最高の政治レベルを捉えたとき、明白になった。特に外交分野で、ついで内務人民委員部(NKVD)やその下部の秘密情報機関でも、この迫害がユダヤ人を不釣り合いに高い割合で犠牲にした³⁹。

【独ソ不可侵体制下のユダヤ人——1939 - 41ソ連併合地域——】

第二次大戦前夜、ソ連には約300万のユダヤ人がいた。1939年8月23日の独ソ不可侵条約の秘密協定に従い、ソ連はノモンハン事件で関東軍に壊滅的打撃を与えて対日勝利を確定し、9月16日停戦を踏まえて⁴⁰、翌日ポーランド共和国領土東部に進駐し、併合し、さらに40年までにバルト諸国、北ブコヴィナ、ベッサラビアを併合した。これによりさらに186万人のユダヤ人が加わった。さらにドイツが39年に占領したポーランド西部からの

³⁸ VEJ, 7, S. 17-18.

³⁹ Ebd., S. 18.

⁴⁰ アルヴィン・D・クックス『ノモンハン 草原の日ソ戦—1939』(岩崎俊夫訳、秦郁彦監修、朝日新聞社、1989)下、244。

20万人以上のユダヤ人難民がいた⁴¹。合わせると約500万人となる。

ポーランド侵攻後の反ユダヤ主義迫害の最初の波を生き延びた難民は、赤軍到来によってさしあたりはほっとした。同じことは、ポーランド共和国で社会的に差別されていた東部ポーランドのユダヤ人の一部、特に1935年からの政府の反ユダヤ主義政策で苦しんでいたユダヤ人についても当てはまった。しかし、支配的だったのは、ドイツ人に対する不安であった。たくさんのユダヤ人が「ドイツの悪夢からの救済」で、ほっとした。しかしながら、ソ連併合地域のたくさんのポーランド人、ウクライナ人、バルト人、ルーマニア人の目には、新しい体制がすぐに「ユダヤ的」だとみえた。例えば、ユダヤ人は東ガリツィアでソ連の行政人員の約13%しか占めていなかった。したがって人口比ではごくわずかしが不均衡でなかったにもかかわらず、あたかも全体的にユダヤ人が行政において優勢だという主観的な印象が喚起された。この地域がポーランドに属していた時には、この地には一人のユダヤ人官吏もいなかったからである。ポリシェヴィキの見地からするとユダヤ人は地域の自治を構築するためにはさしあたり理想的な候補者であった。一方では平均以上に教育を受けていたからであり、他方では、特にウクライナ人やポーランド人と違って、自分たち独自の国家に関してはほとんど野心がなかったからである。しかし、彼らの政治的上昇可能性はもちろん狭い限界の中にあっただ。東ポーランドでは、ソ連が地域のユダヤ人やポーランド人のマイノリティに属する市長や警察隊長をすぐに「東方出身の」ウクライナ人や白ロシア人に入れ替えた⁴²。

その上、ほとんどのユダヤ人は新しい主人の厳しい手をすぐに感じた。工業と行政では新しいキャリアの可能性が出てきたが、新体制の経済的抑圧はユダヤ人に特に激しかった。ユダヤ人住民の大部分は零細自営業者だった。ほとんどは手工業者や小商人であった。彼らは一般的には、新しく導入された税金や所有権の制限を埋め合わせうるような予備資金はなかった。

⁴¹ VEJ, 7, S.18.

⁴² Ebd., S. 19.

多くのユダヤ人がドイツが占領したポーランド地域に逃げだした。「ロシア人によって餓死させられるよりは、ドイツ人に搾取される方がいい」とは、1940年初めに二人のユダヤ人難民がカウナスのアメリカ大使館で吐露したことだった⁴³。

さらに新しい権力者は併合地域のそれまでの社会的政治的生活を完全に転換させ、一步一步ほとんどすべてのユダヤ人の組織や施設を解体した。NKVDの逮捕者リストには、ポーランド人、ウクライナ人、バルト人と並んでユダヤ人の宗教と世俗の諸政党のたくさんの活動家が載っていた。ボルシェヴィキが1940年初めから41年6月までに最終的に30万人以上を併合したポーランド、バルト、ルーマニアの諸地域から国の東方や北方に追放したとき、その中にはたくさんのユダヤ人も含まれていた。そこには、数千人の「社会的に敵対的な諸分子」（すなわち特に自営業者や反対派）の他に、ソ連国籍を取得しようとしなかった約7万6千のユダヤ人難民がいた。ボルシェヴィキは、国籍非取得を非忠誠行為とみなした⁴⁴。

【ソ連による迫害——疎開と逃亡】

ところが、ここに歴史の皮肉があった。こうしたソ連の暴力措置がたくさんの難民の命を救ったのだ。確かにたくさんの追放者が輸送途中で、あるいは「特別入植地」で寒さや飢餓、疾病で死んだ。しかし、ソ連併合地から独ソ境界のブーク川を越えて西のドイツ支配地域に帰還したポーランド・ユダヤ人のうちで、生き延びたものはほとんどいなかった。モスクワの指導部はポーランドのドイツ占領地域におけるユダヤ人迫害について知っていた。秘密警察の12ページの報告書は、すでに1939年末にドイツ当局の反ユダヤ措置の数々（ユダヤの腕章義務付け、追放、射殺など）の情報を記録していた。だが、政治局はこうした情報に鍵をかけていた。39年8月モロトフが独ソ不可侵条約に署名して以降、ソ連検閲当局はナチ体制

⁴³ Ebd.

⁴⁴ Ebd., S. 20.

に対する批判的報告を、したがって反ユダヤ的政策についての報告も抑圧した⁴⁵。

もちろん完全に秘密にすることは、できなかった。たくさんの西部ポーランドからの難民がそれについて報じていたからである。しかし、そうした情報はごく小さな範囲にしか広まらなかった。ブーク川東方のユダヤ人にはポーランドにおけるドイツの迫害政策を見抜くことが拒まれたままだった。そうでないものも、ドイツ人が噂として広まった犯罪を実際に行っているとは想像もできなかった。あるいは、孤立した逸脱と見なした。さらに多くのものには、第一次大戦期のドイツ人が比較的「よく組織された規律のある国民」として記憶に残っていた。反ユダヤ主義の犯罪の情報を信じたものでさえ、ドイツの政策が民族殺戮を目指すなど可能とは思えなかった⁴⁶。

だが、ソ連のユダヤ人の多くが、ドイツの危険に脅かされていることは予感していた。そのことは、少なくともドイツのソ連への奇襲開始後、ソ連後背地に流れ込んだ1千万以上の難民や疎開者に占めるユダヤ人の不釣り合いに高い割合が示していた。1941年12月1日までにその割合は難民の少なくとも26%に上っていた。ただし、ソ連の難民のうち民族として確認されたのは240万人に過ぎなかった（ユダヤ人はソ連では民族として認知され、その身分証明書に記載されていた）。個々の地域ではもっと正確な数値があった。そして、その数値はもっと高い割合を示していた。たとえば、北コーカサスのクラスノダール地域では1941年10月1日に総数21万8千人の難民のうち、73%がユダヤ人であった⁴⁷。

難民に占めるユダヤ人の高い割合は、ソ連指導部が明らかに危険に脅かされている人間集団を安全なところに特別に匿おうと努力したことを意味しない。ドイツの奇襲攻撃の最初のショックの後、かなり秩序だった疎開

⁴⁵ Ebd.

⁴⁶ Ebd., S. 20-21.

⁴⁷ Ebd., S. 21.

が始まった時でさえ、たくさんのユダヤ人は取り残された。鉄道車両の過半数は前線に近い地域ではなく、モスクワやレニングラードに投入され、その住民を国の東部地域へ運ぶために使われた。さらに、最初は軍需経営の熟練労働者や党と国家の役人が家族とともに疎開されるべきものとされた。しかし、ソ連西部地域では、ごくわずかのユダヤ人が、金属工業で働き、党・政府の役職を占めたに過ぎなかった。その他のユダヤ人は、戦争経済に不要と見なされた⁴⁸。

したがってほとんどのユダヤ人は自分の力で逃げなければならなかった。多くのものにはその力も、資金も食料もなかった⁴⁹。その上、戦争最初の局面でNKVDの国境部隊は、併合地住民に旧ソ連地域への道を閉ざした。西部地域からの反ソの潜在的サボタージュ者（今後抵抗の主体になりうるもの）に対して地元住民を守るためであった。そのこともあって、ソ連が西部で併合した西部諸地域に住む約170万のユダヤ人のうち、ドイツ人からの逃亡に成功したのはせいぜい10万人であった。残ったもののうちごくわずかのみが、戦争を生き延びた。旧ソ連地域のユダヤ人はより早く危機を脱することができた。国防軍が1941年10月中頃に攻撃を広範囲で停止するまでに占領した地域から、総数で約90万人が逃げ出した。それはその地域にもともと住んでいたユダヤ住民のおよそ55%であった。さらに東の地域では、ユダヤ人のもっと多くの割合が逃げることに成功した。ただ、そこに住んでいたユダヤ人の数ははるかに少なかった。難民の一部は国防軍が42年の夏に南ロシアとコーカサスに進撃する際に、再び捕捉されてしまった。42年末までにドイツ占領東部地域で約250～260万人のソ連、バルト諸国、ルーマニア、ポーランドのユダヤ人がドイツとその同盟者の暴力の被害者となった⁵⁰。

⁴⁸ Ebd.

⁴⁹ ある難民から別の難民が家財道具を盗んで逃亡するといった事態も生じた。Tagebuch von Fayvel Vayner, 29. 6. 1941, VEJ, 7, Dok. 10, S. 136.

⁵⁰ Ebd., S. 21-22.

4. ソ連征服戦争の準備

【戦争の目標と経過概略】

ソ連に対する戦争は1920年代以来ヒトラーの中心的政治目標であった。彼は単にコミュニスト体制を破壊してこの国を収奪するだけではなく、ドイツ人の「生存圏」を獲得しようと欲した。彼が1940年にソ連攻撃を最初に具体的に熟慮した時、その動機はさしあたり目下の戦況によるものであった。対英戦争ではまだ何の勝利の見通しもなかったが、ヒトラーは赤軍がスターリン粛清で弱体化しているとみてソ連を奇襲攻撃で排除してしまおうと考えた。さらに彼はUSAが戦争に介入しうるよりも前に敵を片付けてしまうことを望んだ⁵¹。

ポーランド以上にソ連の国家と指導層の主体的力量とその抵抗は強力なことははっきりしていた。それに対する進撃こそは、ソ連住民に対する犯罪の過酷さに対応していた。ヒトラーが総統官邸で1941年3月30日、ソ連攻撃軍の司令官たちに攻撃ガイドラインを伝達した。参謀総長ハルダーの記録によれば、「戦いは西方における戦いとは非常に違う」と。目標は、「ユダヤ・ボルシェヴィズム」の破壊、植民地獲得、そしてスラヴ民族の征服であった。征服した領域は、ドイツに原料と食料の無尽蔵の貯蔵庫を獲得させるべきものとされた⁵²。

たくさんの官僚や軍人の性急な支持を受けて、ヒトラーとその臣従者たちは奇襲攻撃の数か月前から戦争で引き起こされる無法な諸事件の抑制と

⁵¹ Ebd., S. 22.

⁵² Hillgruber (1965), S. 515f. 前にも述べたことだが、一言すると、ヒルグラーバーは、「征服戦争 (Eroberungskrieg)」と「絶滅戦争 (Vernichtungskrieg)」という概念を使い、その後の研究 (資料集の解説者も) がこの区分を踏襲している。しかし、独ソ戦の過酷な史的展開を知った後での区分の仕方ではないか、「絶滅戦争」という概念は事後的に創作されたものではないか、というのが拙稿の立場である。

民間人の保護のためのすべての規則を体系的に無視した。1941年5月2日の次官会議は、「戦争は、第3年度に全国防軍がロシアの食糧で養われる場合にのみ、継続できる」とした。そのためには北部ロシアやソ連の諸大都市をウクライナ穀倉地帯から切り離すのであり、こうすれば、「疑いもなく何千万人かが餓死するであろう」とした⁵³。同様に、食糧農業省次官ヘルベルト・バッケは、占領地のドイツ人農業指導者に奇襲攻撃直前、「12か条の命令」を与え、その中で「ロシア人」について、「胃は伸縮性があり、したがって誤った同情をしてはならない」と。この戦争でソ連側は、総数で2000万人が命を失ったとされてきた。ただ、民間人の犠牲者数については論争があって、最近では多くの算定が総犠牲者数2700万としている⁵⁴。

確かにソ連軍はドイツの攻撃でいたるところで不意を突かれたが、国防軍の「電撃戦」はすでに最初の局面で挫折した。ヒトラーや彼の将軍たちは赤軍の崩壊を確信していたが、それは起きなかった。ドイツの戦車軍団はソ連の前線を多くの場所で切り裂き、幾つかの包囲戦でそれぞれ何十万の捕虜を手に入れたが、ソ連の抵抗はドイツ指導部が期待したよりも頑強であった。ヒトラーが1941年7月、赤軍はほとんど敗北したも同然と思ったが、その実、国防軍はこの時期、42 - 43年のスターリングラード攻防戦ではじめて上回るほどの損害を被っていた。東部戦線の6か月間に約30万人の国防軍兵士が死亡し、60万人以上が負傷で抜け落ちた⁵⁵。

したがって、1941年9月19日のキエフ占領で、包囲戦の戦争の最初の局面が終わったとき、ドイツ軍はもはや人的予備がなくなっており、新たな攻勢でさらなる損害を埋め合わせることはできなくなっていた。その上、弾薬、燃料、糧食も不足した。にもかかわらず、10月2日、モスクワ攻撃を前にしたヒトラーの東部前線兵士への檄は、クレムリンの権力者の意図

⁵³ Aktennotiz über die Besprechung der Staatssekretär am . 2. 5. 1941, PS-2718, IMG, Bd. 31, S.84.

⁵⁴ VEJ, 7, S. 23.

⁵⁵ Ebd.

がドイツだけでなく全ヨーロッパを絶滅しようとしているとし、「今年最後の大きな決戦」で、単に勝利だけでなく平和のための最も重要な前提条件を勝ち取れと、冬の到来前にソ連首都の征服に固執した⁵⁶。しかし、ソ連軍指導部はこの間にモスクワ前面の防衛陣地を強化し部隊増強に成功していた。それどころか12月5日には赤軍は反撃に転じ、ドイツ前線を打ち破ることができた。ただ、さらなる進撃のためにはこの時点では赤軍には必要な予備が欠如していた⁵⁷。

1941年の年の瀬から42年初め、ぬかるみと雪が戦争を決定したのではなく、むしろ諸資源を動員する敵国の能力にあることが示された。この点でソ連は有利であった。モスクワ指導部はソ連工業の一部を国土の東部に疎開させていた。そこにはすでに新しい工業中心地が存在した。さらに、赤軍は42年からは戦時物資をUSAから獲得した。にもかかわらず、ヒトラーと国防軍指導部はドイツが原料基盤を構築すれば戦争に勝るとの幻想にとらわれたままであった。そこでドイツの42年夏の攻撃はコーカサスの油田地帯の征服を目指した。スターリンはモスクワに対する攻撃継続を予期していたので「ブルー作戦」はさしあたり攻撃側が成功した。国防軍はドン川を越えて南に進撃した。しかしながら、カスピ海の油田地帯は射程外にとどまった。しかも、グローズヌイとマイコープ周辺の運搬設備をソ連は撤退前に破壊していた。攻撃の第二の目標、スターリングラード占領によるヴォルガのブロックも、同様に失敗に終わった。赤軍がこの都市を死守したのである。その逆に、ドイツ第6軍と同盟軍は総数30万の兵士とと

⁵⁶ Aufruf Hitlers an die Soldaten der deutschen Wehrmacht vom 2. 10. 1941, Dok.91, VEJ, 7, S. 307-309.「敵は兵士から成るだけでなく、大部分は野獣から成っているのだ」、もうすぐ25年となるユダヤ支配の結果は、兵士が「自らの目で個人的にも知ることとなったドイツ人には想像もつかない貧窮」であり、その「担い手は、ボルシェヴィズムであり、最も深い根拠において資本主義の最も普遍的な形態と同じものだ」と、ボルシェヴィズムと資本主義をユダヤに結びつけて串刺しにしようとした。

⁵⁷ VEJ, 7, S. 24.

もにスターリングラードに包囲され、国防軍は42年から43年にかけての冬、壊滅的敗北を喫した。72日間の攻囲で少なくとも16万4千人のドイツ人と同盟国人が死に、約4万人の負傷者が脱出した。10万8千人の兵士が捕虜となった。うち帰還したのは最終的に6千人であった。しかし、約50万人の死者を伴うソ連の軍事的損害は、明らかにドイツよりも過酷だった⁵⁸。

第6軍に対する勝利と1943年7月クルスクでの国防軍攻勢の挫折の後、東部戦線での軍事的イニシアティヴは、広範に赤軍に移った。赤軍は43年8月いくつかの前線地区で反撃を開始し、ドイツ軍部隊を100キロ後退させた。ソ連パルチザンは、この時点ですでにとくにドイツ陸軍後方地域と民政統治下の東部地域の広い範囲を支配していた。いくつかの場所ではドイツ支配区域が比較的大きな町とその周辺に制限され、そのことがさらに国防軍の補給を困難にし、兵力を縛った。44年夏のソ連の攻勢の強襲のもとで、ついに中央軍集団が白ロシアで崩壊したが、赤軍はその間に南ではドナウまで突き進んだ。これにより、ドイツと同盟国は、39年の独ソの暫定的国境線の後ろまで追い立てられた。ただ北部ラトヴィア、北部軍集団の30個師団が「クールラント軍」として終戦まで持ちこたえた。北部軍集団が2年以上をかけてレニングラードを兵糧攻めにしたが、44年初めにはバルト諸国に撤退しなければならなかった⁵⁹。

【征服政策の諸準備と大量殺害への諸契機】

この過程の最も重要な人物は、ヒトラーの他に、ヘルマン・ゲーリングとハインリヒ・ヒムラー、そしてバルトドイツ人のアルフレート・ローゼンベルクであった。ゲーリングは四か年計画全権として経済・食料関係の省に彼の権限を拡大した⁶⁰。1940年夏からこれらの官庁の次官（とくにパ

⁵⁸ Ebd.

⁵⁹ Ebd.

⁶⁰ Bericht über Besprechung der Wehrmachtstelle am 29. 4. 1941, PSB1157, IMG, Bd. 27, S.32.

ウル・ケルナーとヘルベルト・バッケ)は独自に設立された東部防衛経済参謀部(Wehrwirtschaftsstab Ost)で征服すべきソ連地域の搾取を計画した。それに対応した指針は、いわゆる「^{グリーンマップ}緑ファイル」にまとめられ、41年6月16日に発効した⁶¹。6月20日、ローゼンベルクは東方問題専門家会議で長時間の演説をし、南ロシアと北部コーカサスの産物をドイツ民族の食糧供給のために使用すること、「この余剰地域でロシア民族を養う義務はなく、いかなる感情も超越した厳しい必然性」が必要だと強調した⁶²。定式化された企ては、ソ連の諸大都市と北部諸地域を兵糧攻めするものであったが、間接的にはユダヤ人に対しても向けられていた。ベルリンではダーレムの人口研究者の諸研究によってソ連のほとんどのユダヤ人が諸都市で生活していることが正確に知られていた。したがって、ユダヤ人が餓死することを予定していたのだ⁶³。

ヒムラーはポーランド征圧後、植民問題での指令権限を獲得し、ヒトラーにドイツ民族性強化全権(Reichskommissar für die Festigung deutschen Volkstums, RKF)に任じられて、すでに見たように併合地域のドイツ化・ゲルマン化とポーランド人やユダヤ人の追放などの諸措置を推進していた。彼はその政策遂行に親衛隊全国指導者(Reichsführer SS)・ドイツ警察長官(Chef der deutschen Polizei)としての権力を行使した⁶⁴。対ソ戦争は、彼にはるかに大規模な構想を抱かせた。41年6月末、ヒムラーは^{ライヒ}帝国保安本部の専門家で農業科学者コンラート・マイヤーに、すでに40年に発展させていた「東方移民」諸計画を具体化し、ウラルまで達する「植

⁶¹ Urteil, IMG, Bd., 1, S. 317f; 攻撃開始前に国防軍最高司令部に与えられた命令は、「ドイツのために食料と石油を可能な限りたくさん獲得することが、作戦の経済的主要目標である」とした。USSR-10, IMG, Bd. 22, S.550.

⁶² Rede Rosenbergs vor dem engsten Beteiligten am Ostproblem am 20. Juni 1941, PS-1058, IMG, Bd., 26, S.622.

⁶³ VEJ, 7, S. 25.

⁶⁴ 前掲拙稿「第三帝国の戦争政策とユダヤ人迫害——ポーランド1939年9月～1941年6月——」。

民架橋 (Siedlungsbrücke)」案の起草を委託した。新しい東部総合計画 (Generalplan Ost) は、3100万のスラヴ人のシベリアへの「移住」を予定した。その上、500万から600万のユダヤ人の「退去」が計算に入れられていた。その数は、ポーランドとソ連の当時のユダヤ人の人口にほぼ照応していた⁶⁵。

これは、1941年1月以来ヒムラーの他の二人の部下が練っていた構想に順応するものだった。ヨーロッパ・ユダヤ人をマダガスカルに追放する計画が戦況により放棄された後、ヒトラーとヒムラーは、治安警察・保安部長官ラインハルト・ハイドリヒに新しい「ユダヤ人問題の解決策」を託した。その政策の仕上げはアドルフ・アイヒマン、ハイドリヒ率いる帝国保安本部の第IV局B4 (ユダヤ人問題担当課) 課長が引き受けた。いくつかの証拠から41年3月にはヨーロッパ・ユダヤ人をソ連領の北部・東部の広大な「食糧不足と餓死の地帯」に追放することが考えられていたと推測されている⁶⁶。

【戦争法規の無視とコミッサール命令】

ヒトラーは、41年3月30日の2時間半の長時間の軍最高幹部たちに対するスピーチで、ロシアに対する我々の課題は、ソ連の「軍の壊滅」であり、「国家の解体」であるとした。その闘いは、「ボルシェヴィキのコミッサールと коммуニストのインテリ階級の絶滅」であり、新しいインテリ階級が形成されるのを阻止することであった。軍隊は何が重要かを知らなければならず、コミッサールとGPU連中は犯罪者であって、そのようなものとして処理しなければならなかった。闘いは、西方における戦いとは「非常

⁶⁵ VEJ, 7, S. 25.

⁶⁶ Ebd., S. 26. Götz Aly, Endlösung. Völkerverschiebung und der Mord an den europäischen Juden, Frankfurt am Main 1995, S. 271-279. ゲッツ・アリー『最終解決——民族移動とヨーロッパのユダヤ人殺害』(山本尤・三島憲一訳、法政大学出版社 1998)、213-220。

に違ったものとなる」のだった。東方では、「非情さこそが将来のために優しい」こととされた⁶⁷。

ヒトラーは将軍たちにロシア軍に対する野蛮な行動を正当化する論拠として、ロシアがハーグ陸戦協定に「参加していない」ことを挙げた。ドマルスによれば、それは明らかな嘘であり、ロシアはハーグ陸戦協定等に拘束されることを認めたジュネーブ協定の諸規定を持っていた。しかし、ヒトラーと将軍たちは、それを無視し、ソ連兵士を捕虜にする際、あるいは捕虜にした後、大量虐殺することを妨げなかった。軍の大学にはジュネーブ協定や捕虜取り扱いに関する教科がなく、将軍たちは根本的な国際法問題について教育を受けていなかった⁶⁸。

ドイツ指導部は対ソ戦のために戦争法規が兵士に課していたすべての制限を撤廃した。

国防軍の裁判は、第一に部隊規律の維持に資すべきもので、東部作戦地域の広大さ、規律維持に当てられる人員の少なさなどから、裁判はこの主要任務に限定すべきであった。「敵の民間人の犯罪行為」の取り扱いにおいては、戦時裁判と即決軍法会議の「対象外」とした。敵義勇兵は部隊により戦闘中ないし逃亡中、「仮借なく片付け」、国防軍の軍人軍属に対する民間人のその他の犯罪は、部隊によりその場でもっとも厳しい手段で攻撃者の殲滅に至るまで鎮圧するものとした⁶⁹。

国防軍最高司令部長官 (OKW) ウィルヘルム・カイテルは1941年5月、「ボルシェヴィキの扇動者と義勇兵、サボタージュ者、ユダヤ人に対する仮借ないエネルギーな断固たる措置」を兵士に求めた。その指針の冒頭で、「ボルシェヴィズムは国民社会主義ドイツ民族の不倶戴天の敵だ。この破

⁶⁷ Halder Tagebuch, Eintrag v. 30. 3. 1941, z. n. Max Domarus, *Hitler. Reden 1932 bis 1945*, Wiesbaden 1973, Bd. II, S.1681-1682.

⁶⁸ Ebd., S.1683.

⁶⁹ Erlaß über die Ausübung der Kriegsgerichtsbarkeit im Gebiet "Barbarossa", *Verbrechen der Wehrmacht* (2002), S. 46.

壊的世界観とその担い手に対しドイツの闘いが向けられているのだ」とした。赤軍の「陰険な戦い方が予測され」、そのすべての構成員——捕虜も——に対して、「最大限の冷厳な態度と最も鋭い注意深さ」が求められた。部隊を捕虜にした場合には、その指導者を直ちに部隊から隔離しなければならいとした。ドイツ兵士はソ連では「統一的住民」に対峙しているのではなかった。多数のスラヴ、コーカサス、アジアの諸民族を含んでおり、「ボルシェヴィキの権力者の暴力でまとめられている」に過ぎなかった。しかも、ソ連ではユダヤの宗教・民族が「強く代表されている」。ロシアの住民の大多数は、とくに、ボルシェヴィキ体制によって貧窮化した農村住民は、ボルシェヴィズムに対し内心では拒絶の態度なのだ。非ボルシェヴィズムのロシア人のなかでは、民族意識が深い宗教的感情と結びついている。ボルシェヴィズムからの解放についての喜びと感謝は、しばしば教会との結びつきなどに表現されている。礼拝や聖体行列などは妨げられ、脅かされてはならない、と⁷⁰。これを受けて、6月初めには、赤軍の軍事コミッサールと政治委員を直接前線で射殺する命令、いわゆるコミッサール命令が出された。この命令は実際の適用においては、赤軍の「ユダヤ人将校」、さらには赤軍のすべてのユダヤ人への攻撃に活用されたようである⁷¹。

5. 奇襲攻撃・軍後方地域拡大・激戦化と治安確立課題

【軍後方地域における特別出動部隊^{アインザッツグルッペ}】

カイテルの先述の命令が示すように、ドイツ国防軍は広大な占領地の治安平定をそれに割きうる人員が少ないがゆえに苛烈極まるやり方で執行し、戦闘による破壊状態との相関で武力行使が過激化することになった⁷²。こ

⁷⁰ Richtlinien des OKW/WFSt für das Verhalten der Truppe in Russland vom 19. 5. 1941, Dok.3, VEJ, 7, S.120.

⁷¹ VEJ, 7, S. 27.

⁷² このカイテル命令は、IMG, Bd. 20, S.686.

れと密接に協力しつつ行動するのがインザッツグループであった。インザッツグループとは帝国保安本部の組織、すなわち治安警察・保安部の占領地・軍後方地域への出動部隊であり、その機能・役割に注目して機動部隊、特別出動部隊、ないし行動部隊などと訳される。正規軍同士の激戦により地域の政治秩序・経済秩序などが破壊されたあとに進駐し、軍後方地域の治安を迅速に確立する使命を持った武力組織であり、各地で「処刑を担当」した。ヒムラーとハイドリヒはこのような部隊をすでにチェコスロヴァキアの段階的占領やポーランド攻撃の際に編成していた。この部隊は今度も国防軍に付き従って進駐し、占領地域でOKW指針が規定しているように、二つの対抗的体制の最終的闘いから生じる「総統の特別使命」を遂行した。ハイドリヒはインザッツグループが完全にフリーハンドを持つことを重視した。それゆえ、彼は1941年3月末、インザッツグループが軍事地域で「自己の責任で民間住民に対する執行措置を遂行してもいい」という合意を取り付けていた⁷³。A、B、C、Dの4つのインザッツグループ特殊部隊は、治安警察と保安部から隊員をリクルートした。そして、武装親衛隊と秩序警察（制服警察、緑色警察）によって補強された⁷⁴。インザッツグループは、インザッツ・コマンド(EK)と特別コマンド(SK)に分けられ、それらはそれぞれ約70から120名からなり、さらに41年夏からは20ないし30名の小部隊に分けられた。インザッツコマンドは陸軍後方地域で作戦行動をとり、特別コマンドは前線直後に投入された。インザッツグループの隊長は、第三帝国のエリートに属していた。インザッツグループAを率いたシュターレッカー(Dr. Walter Stahlecker)は、すでに1938-39年にチェコスロヴァキア進駐の際にインザッツグループ

⁷³ VEJ, 7, S. 27.

⁷⁴ 治安平定の主体・中心は治安警察であり、作戦における秩序警察の助力は必要に応じて要請するものとされていた。Schreiben (Geheime Reichssache) des Chefs der Sicherheitspolizei, gez. Heydrich, an die HSSPF Jeckeln, v. d. Bach, Prützmann, Korsemann vom 2.7.1941, Dok.15, VEJ, Bd.7, S.148.

ンを指揮し、39-40年にはプラハ、次いでノルウェーで治安警察司令官であった。Bの隊長は刑事警察長官ネーベ (Arthur Neebe)、Cの隊長はプラハの元保安部長のラッシュ (Dr. Otto Rasch)、Dは国内保安部長オーレンドルフ (Dr. Otto Ohlendorf) であった。アインザッツコマンドと特別コマンドの隊長たちも平均以上に高学歴であった。Aの中には17人のコマンド隊長のうち11人が法学部出身で、そのうち9人が博士号保持者であった⁷⁵。東部占領地域への出動は、彼らにとって自分のキャリアを引き上げるための歓迎すべきチャンスであった⁷⁶。

【構成と軍政・民政統治下の位置】

アインザッツグループは、総数3000人弱であった。ヒムラーはそれではあまりにも少な過ぎるとみた。そこで、すでに1939年に編成していた警察大隊 (Polizeibataillon) を活用することにした⁷⁷。それは数百人規模の部隊で、一部は現役警察官、一部は予備警察官とから編成された。その中の相当数が第一次大戦で出動した者たちであった。41年6月、総勢約4500人の9つの警察大隊が編成された。さらにヒムラーは、武装親衛隊のいくつかの部隊も動員した。41年7月末、ヒムラーはドイツの後背地において何千人かの地元警察官を投入することも決めた。これらさまざまな部隊の中央指導部は3人の高級親衛隊・警察指導者 (HSSPF) の任務となった。彼らは最初、陸軍後方地域司令官の、後に民生当局それぞれの^{ライヒスコミッサール}帝国委員の下に置かれた⁷⁸。

⁷⁵ 親衛隊幹部のエリート性に関しては、大野英二『ナチ親衛隊知識人の肖像』(未来社、2001)。

⁷⁶ VEJ, 7, S. 28.

⁷⁷ 予備役になっていた普通のドイツ人警察官が戦時下・独ソ戦激化の状況下に動員され、その直後からユダヤ人射殺の実行者になる実態に関して、クリストファー・ブラウニング『普通の人びと——ホロコーストと第101警察予備大隊』(谷喬夫訳、筑摩書房、1997)。

⁷⁸ VEJ, 7, S. 28-29.

【開戦直前の作戦確認】

奇襲攻撃前の週、ハイドリヒと秩序警察長クルト・ダリュューゲは何度も会ってアインザッツグルッペの任務を確認した。1941年7月2日の高級親衛隊・警察指導者宛書簡でハイドリヒは、殺害すべき集団をリストアップした。すなわち、対象は、ソ連の党と国家の指導的役員、中間的役員と同様にすべての「ラディカルな諸分子（サボタージュ犯人、宣伝家、ゲリラ兵、暗殺者、扇動者等）」であって、さらには「党と国家の地位にあるユダヤ人」であった⁷⁹。対象が限定されたようにも見えるが、「ラディカルな諸分子」を事態の推移に合わせて拡大していくことは可能であった。むしろそれが必然となって、ユダヤ人殺戮拡大において現実化した⁸⁰。

全出動の「当面の目標は政治的な、すなわち第一に新しく占領した地域の治安警察的平定」であった。そして、「最終目標は経済的平定」であった。執行すべき全措置は、最終的には最終目標——そこに重点が置かれるべきだが——に合わせなければならないが、この国で何十年にわたって続いてきたボルシェヴィキの造形を鑑みれば、最も包括的な領域で仮借なき過酷さでもって遂行されなければならない、とした。しかも、その場合においても、個々の民族（特にバルト人、ルテニア人、ウクライナ人、グルジア人、アルメニア人、アゼルバイジャン人など）の間の違いを根底において可能な限り目標設定で活用しなければならないのであった⁸¹。

⁷⁹ Dok.15, VEJ, Bd.7, S.146. 処刑対象から、「今後の治安警察的諸措置あるいは占領地の経済的再建のために特に重要な情報を政治的経済的観点で提供できる」人物を除外するように命じている。考慮を払うべきは、経済・労働組合・商業の委員が「残りくまなく処刑されてはならない」ということだった。もしそんなことをすれば、情報を提供する適切な人員がもはや存在しなくなってしまう、と。Ebd., S.146-147. 出動の成果に関する正確な時々刻々の情報の把握もハイドリヒ、そしてヒムラーが命じた。数日おきの「事件通報ソ連」を利用して、現地の治安情勢を見ていったのが、拙著（2001）である。

⁸⁰ VEJ, Bd.7, S.29.

⁸¹ Dok.15, VEJ, Bd.7, S.145.

こうした発想、諸民族を階層的に区別・分断し、それら全体を上から支配するとう権力構造の構想は、まさにヒムラー秘密覚書（1940年春）⁸²に示された発想そのままであった。諸民族の階層構造の中で最底辺に置かれたのがユダヤ人・ユダヤ民族であった。

こうした目標が必要とする限り、すなわち目標実現を阻害する新占領地における抵抗や不穏状態が発生する限り、統合対象外の諸分子を徹底的に鎮圧することは必然の論理となり、それに応じて諸民族の最底辺に位置づけられパーリアとされたユダヤ人大衆への殺戮拡大が必然化する。以下に見るように、アインザッツグルッペの治安平定活動は、ソ連占領地の急速な拡大、占領地の広大さに見合うだけの治安平定要員の少なさ、そのなかでの抵抗・反撃・騒乱・不穏、これに対する占領者による鎮圧という戦闘的關係の中で執行された。そこに反ユダヤ主義の論理とユダヤ人殺戮拡大の力学が貫徹した。「政治的平定は経済的平定の最初の前提」であった以上、ソ連征服による東方大帝国建設とそこにおける経済的平定を最終目的として追求するには、なんとしてでも「政治的平定」を実現する必要があったのである⁸³。

だからこそ、少しでも占領に協力する分子は、最大限に活用するということになる。占領地の「反共産主義的反ユダヤ主義的グループ（antikommunistische oder antijüdische Kreise）の自浄的試み」は決して妨げられてはならなかった。逆に、そうした試みを「痕跡なく」促進しなければならなかった。それは、後にその地の「自衛グループ」をドイツ側からの諸要求に応じさせ、政治的統合に活用するためであった。41年6月29日のハイドリヒのアインザッツグルッペに対する要求は、占領地域でユダヤ人に対する現地住民のポグロムをひきおこさせるようにというもので

⁸² 拙著（1994）、34-38.

⁸³ Dok.15, VEJ, Bd.7, S.145.

あった⁸⁴。

医者やその他の医療関係者も注意深く扱えと命じた。農村では住民約1万人に医者一人なので、発生する可能性のある伝染病の際にたくさんの医者を射殺してしまっていたら、「埋めることのできない空白」が発生してしまうからであった⁸⁵。伝染病は、占領者ドイツ人にも襲い掛かるものだった。大衆に影響力のある正教会の努力に対しても、何も企ててはならなかった。その逆に、正教会をできるだけ奨励すべきだとした。その建前は、「教会と国家の分離」であった。宗教の小宗派の形成にも何も異議を唱えるべきではないと⁸⁶。

【ユダヤ人殺害拡大——兵役能力のある男子から婦女子へ】

奇襲攻撃開始から6週間は、アインザッツコマンドは地域民兵にポグロムを密かにけしかけ、兵役能力ある男子ユダヤ人を捕まえ射殺していった。しかし、41年8月からユダヤ人の婦女子の殺害を開始した。ついには大量射殺で全ユダヤ人共同体を葬り去った。これによって民族集団殺戮への敷居が乗り越えられた。これと並行して、似たような口実で、ドイツ民政統治下の占領官吏たちもユダヤ人を無差別に、また大量に殺害し始めた。ただ、民政統治下ではなお数か月は大量殺害が時折ストップされた。ユダヤ人の一部を労働力として使うためであった。しかし、軍政統治下では完全にユダヤ人を一人残らず抹殺する任務を与えられた⁸⁷。

【侵攻開始から数週間のポグロム】

ほとんどが侵攻数週間のうちに引き起こされた反ユダヤ・ポグロムは、

⁸⁴ Fernschreiben des CdS, gez. Heydrich, an die Einsatzgruppenchefs Nebe, Ohlendorf, Dr.Bach, und Stahlecker vom 29. 6. 1941, Dok.11, VEJ, Bd.7, S.137.

⁸⁵ Ebd., S.147.

⁸⁶ Ebd., S.148.

⁸⁷ Ebd., S.29-30.

以前の東ポーランドとルーマニアの地域、並びにリトアニアとラトヴィアにおいてであった。そこで重要な役割を演じたのは、民族主義的で反共産主義的な組織で、ドイツに亡命していたか地下で活動を準備していたものであった。もっとも影響力のあったのはリトアニアの行動主義戦線(Lietuvos Aktyvistų Frontas, LAF)、リトアニア鉄狼団(Geležinis vilkas)およびウクライナ民族主義団(Orhanizacija Ukraïns'kych Nationalistiv, OUN)であった⁸⁸。

特に急進的だったのはウクライナ民族主義者シュテファン・バンデラの信奉者で、OUN内部に分派を作っていた。独ソ戦開始直後その指導部は、ユダヤ人をそのほかの住民から隔離することを要求した。民族市民軍(Volksmiliz)を創出し、国家所有の保護、泥棒略奪者からの営業の保護、そして「ドイツ軍部隊の支援」などを呼びかけた。そして、食糧の闇商売の阻止、その無視の場合の思い切った処罰の要求を掲げた後、ユダヤ人の把握と「アリア住民からの隔離」、肉体労働への動員を主張した⁸⁹。それが、レンベルクやタルノボルなどでの殺害犠牲者何千人ものポグロムに帰結したとされる。旧ポーランドのヴォリューニエンでは少なくとも20か所でそのようなポグロムが発生した。リトアニアでも、民族主義民兵が反ユダヤ主義の民衆に支援されて最初の数週間にたくさんのユダヤ人を犠牲にした。多くの研究者がこのような暴力沙汰をソ連の秘密警察の犯罪への反動だったと解釈している。ソ連秘密警察は赤軍撤退直前に急いでたくさんの政治犯を射殺した、と。しかし、ハイドリヒの命令文書が示すように、ドイツ側が開戦前から準備していたことははっきりしていた⁹⁰。

たくさんの反ユダヤ主義の檄を飛ばし、ソヴィエトの住民にユダヤ人殺戮を促すビラが撒かれた。「ロシア農民よ！ロシア労働者よ！誰が年がら

⁸⁸ Ebd., S.30.

⁸⁹ Befehl des Bevollmächtigten der OUN, Ende oder Anfang Juli 1941, Dok.12, VEJ, Bd.7, S.138-139.

⁹⁰ Ebd., S.30-31.

年中諸君をとりわけ苦しめてきたのか？誰が、諸君がまだ持っていた最後のものを諸君から奪いとったのか？それはユダヤ人だ！ユダヤ人が過去何年かのロシアの不幸のすべてをもたらしたのだ。ユダヤ人はそれを全世界でやろうとしている。しかし、アドルフ・ヒトラー、大ドイツの偉大な指導者がただ一人このユダヤ人の意図を見抜き、ユダヤ人をドイツから追放した。ドイツには一人のユダヤ人もいない。だからドイツでは大衆への詐欺も大衆の搾取も存在しない。ユダヤ人政治指導者が今や諸君をドイツに対して扇動しているのだ。・・・ドイツ兵士がこの国を征服すれば、ドイツ兵士はユダヤ人が搾取し続けることを許さない。ユダヤ人が諸君にいうことを信用するな。…ユダヤ人打倒！ユダヤ人をロシアから追放せよ。・・・ユダヤ人ボグロムに立ち上がれ！」などと⁹¹。ロシア人をドイツ支配下に統合する武器としての反ユダヤ宣伝であることがはっきりしているであろう。

【ユダヤ人無差別殺戮への諸契機】

前述のように占領初期から数か月、軍後方地域が急速に拡大し、それに応じた広域の治安平定課題の増大、それに対する治安警察・保安部とそのアインザッツグルッペの人員力量の相対的少なさとは、ユダヤ人殺戮拡大の背後にあった力学であった。ハイドリヒがアインザッツグルッペ司令官に与えた先述の1941年6月半ばの口頭命令の執行は、6月27日と7月2日の文書命令を越えていった。アインザッツグルッペAの隊長シュタールエッカーは、「根本的な、文書では詳しく述べられない上からの命令」を掲げて、

⁹¹ Schreiben der Informationsabteilung des AA, Länderreferat Russland, gez. von Bruemmer, vom 4. 7. 1941, Dok.17, VEJ, Bd.7, S.154. 原稿執筆者は法律家・経済学者で、リガ公使館勤務、41年4月から外務省東ヨーロッパ担当官。外務省がナチ体制の中で果たした役割に関する最近の包括的な説明は、独立歴史委員会（エックルト・コンツェ／ノルベルト・フライ／ピーター・ヘイズ／モシェ・ツィンマーマン）著『ドイツ外務省＜過去と罪＞——第三帝国から連邦共和国体制下の外交官言行録』（稲川照芳・足立ラーベ加代・手塚和彰訳、えにし書房、2018）。

8月はじめに「東方地域で与えられたユダヤ人問題清算の新しい可能性」を仮借なく利用しつくすことを要求した⁹²。

彼によれば、ポーランド総督府ではユダヤ人をそれまでの住宅と仕事場にそのままにしておいても深刻な政治危機の源泉が発生することはなかった。それに対して、オストラント（バルト三国と白ロシア）では定住していたユダヤ人や赤色権力者によって連れてこられたユダヤ人が、「ボルシェヴィキ理念の決定的な担い手」であった。たくさんのユダヤ人が「際立った共産主義活動家」であった。これまでの経験から、東方地域の軍事占領が終わった後もかなり長い間「騒乱の震源地」が生まれることが「確実に結論できる」。その扇動やサボタージュ、テロの責任は、これまでの肅清で捕まらなかった коммуニストだけではない。むしろ、まさにユダヤ人こそが、騒乱を引き起こすあらゆる可能性を利用しつくしているのだ。それゆえ、無条件に必要な東方地域の「迅速な解放」が、可及的速やかに、再建作業妨害の発生のすべての可能性を排除することを求めている、と⁹³。占領者・差別抑圧者に対する抵抗・反撃を殺戮拡大の論理とする道筋がここにはっきり出ている。

アインザッツグルッペ
【特別出動部隊の諸活動——Aの報告に即して】

レニングラードを目指す北部軍集団の後についてロシア北部とバルト諸国地域に進駐したアインザッツグルッペAは、1941年10月31日までの全活動報告書を本文143ページ、付属資料18点にまとめて提出した。活動・実績と報告の両面で詳細かつ「すぐれていた」文書は、国防軍と親衛隊警察の密接な協力関係を証拠づける重要文書として、ニュルンベルク主要戦

⁹² VEJ, Bd.7, S.32. Stellungnahme des Chefs der Einsatzgruppe A, gez. Walter Stahlecker, vom 6. 8. 1941, Dok.181, VEJ, Bd.7, S.511.

⁹³ Ebd., S.512.

犯裁判でもかなりたくさん引用されている⁹⁴。そこで、以下では少し詳しく見ておこう。

軍との前もっての協定事項は綿密で、軍との連携は「はじめから、全般的に良好」であり、個々的には「非常に密接で、心のこもった」ものであった。分業関係は軍事的展開に影響され、進撃のあまりの速度に軍の後方地域の諸設備が遅れを取り、当初協定では想定していなかった治安政策的仕事を処理する必要に迫られるといった事態も発生した。他方でコミunistの破壊活動とパルチザンの闘いが地域によっては戦闘地域に「もっとも強く」影響を及ぼした。また、治安警察的諸課題の遂行のために、比較的大きな諸都市に軍と一緒に進出しなければならなかった。それどころか、リバウ、リガ、レヴァル、それにベテルスブルク近郊諸都市の場合は、最初の軍部隊と一緒に進駐した。特にここではコミunist役員やコミunistの資料を把握しなければならなかった。バルト諸国では軍隊の数的不足を補うため、進駐直後から「信頼できる」——反ソ・反コミunismの——地域住民からなる義勇兵部隊を組織した。その成果で例えばリガでは一人のドイツ兵士も被害を受けなかった。ただ、ラトヴィア人部隊の場合、敗走ロシア人との戦いで死者や負傷者が出た⁹⁵。

同じように進駐後ただちに「かなりの困難のもとで」はあったが、地元の反ユダヤ主義勢力を促してユダヤ人に対するポグロムを起こさせた。戦闘終了後、住民が全般的に平穏を取り戻すと、「ポグロムの継続は耐え難いものとなった」⁹⁶。

「命令に従い」、治安警察はあらゆる手段で断固としてユダヤ人問題を解決することを決定した。しかし、ドイツ人のなかにも大騒ぎを引き起こす

⁹⁴ 26か所。Dokumenten-Index, IMG., Bd. 23, S.487. たとえば, IMG, Bd.1, S.410. 報告書そのもの(ただし大部なので抜粋)は, L-180, Bericht des Führers der Einsatzgruppe A, des SS-Brigadeführers Stahlecker über die Tätigkeit der Gruppe bis zum 31. Okt. 1941, IMG, Bd., 37, S. 670-717.

⁹⁵ L-180, IMG, Bd. 37, S. 671-672.

⁹⁶ Ebd., S. 683.

に違いないような「異常な過酷な諸措置は直ちには望ましくない」との態度であった。外に対して示さなければならないのは、地元住民自身が「長年のユダヤ人による抑圧に対する自然な反応」として、また独ソ不可侵協定の秘密勢力圏に基づくソ連進駐下の「ボルシェヴィキの強制支配」で「もっともひどいこと」⁹⁷を体験したことからくる「コミュニストのテロに対する自然な反応」として、最初の措置を自分から執ったということであった⁹⁸。

前線の急速な移動、軍後方地域から民政地域への統治形態の変化が「あまりも頻繁で、急速」だが、治安警察ではそうした変化を阻止し、同じ指揮官が同じ場所にとどまるようにしなければならなかった。治安警察は、事実と人間に関する知識を有する一定の恒常性を持った組織として「基本的優位性」を持つと自認していた。その見地から、政治的経済的文化的問題も「操作しようと試みた」⁹⁹。

【治安平定の主要課題とコミュニスト・ユダヤ人の処刑】

全出動地域における治安警察の仕事で前面にあったのは、コミュニズムとユダヤ人との戦いであった。ソ連軍とともにソ連官吏と共産党のソ連役員は逃亡した。だが、バルト諸国の住民の中には、赤軍撤退後も残っているコミュニズム分子は「除去されなければならない」との認識があった。この住民部分の基本的態度が治安警察の粛清作業を「根本的に容易にした」。この粛清には、リトアニアではパルチザン、ラトヴィアとエストニアでは自営団が協力した¹⁰⁰。

特別コマンドは共産党とその付属諸組織の最も重要な建物、共産主義出版物の編集室、職業団体の事務所、逃亡共産党員幹部の住宅などを占拠し、

⁹⁷ Ebd., S.682, 684.

⁹⁸ Ebd., S. 672.

⁹⁹ Ebd., S. 673.

¹⁰⁰ Ebd., S. 684.

捜索を行って、資料を没収した。こうした作業は国防軍の防諜部の捜索隊が来る前に着手した¹⁰¹。自宅捜索のほか、残存共産党役員や熱心な支持者、それに赤軍兵士の体系的な追跡も行った。大きな諸都市ではコマンドの全出動可能隊員を動員し、全自営団組織を使い、秩序警察の支援も得て大捜索作戦を展開し、多数逮捕した。都市での最も緊急の諸任務を遂行した後、小さな部分コマンドによって農村部の粛清も実行したが、ここでも自営団が「価値ある協力」を得た¹⁰²。

治安警察の粛清活動は、「根本的命令に従いユダヤ人の可能な限りの除去」を目標とした。そこで特別コマンドは、リトアニアの反ソ・パルチザン、ラトヴィアの補助警察など、選び抜かれた勢力を伴って諸都市と農村で「大規模な処刑を実行した」。処刑コマンドにリトアニアやラトヴィアの勢力を割り当てるにあたっては、家族や親類がロシア人によって殺害されたり連行されたりした男子が特に選抜された。特に鋭く包括的な鎮圧処置がリトアニアで執られた。場所によって、とくにカウエン（都市カウナスのドイツ名）で、ユダヤ人が武装し、ゲリラ戦に加わり、放火を行ったからであった。リトアニアのユダヤ人は特に積極的なやり方で「ソヴィエトと手に手を取って」活動していた。リトアニアで抹殺したユダヤ人の総数は、7万1105人に上った。ポグロムではカウエンで3800人、それより小さな町々で約1200人が「除去された」¹⁰³。ラトヴィアでもユダヤ人はドイツ国防軍の進駐後、サボタージュと放火に「参加した」とする。デュナブルクではユダヤ人によってその種のたくさんの放火が行われ、町の大部分が犠牲になった。発電所が放火で焼き尽くされ、主としてユダヤ人が居住する通りは、「無償だった」などと。そして、ラトヴィアではこれまでに総数3万のユダヤ人が「処刑された」。500人がリガのポグロムで「無害化された」と。エストニアには、東方進軍開始時点で4500人のユダヤ人が住んでいた。その多

¹⁰¹ Ebd., S. 684.

¹⁰² Ebd., S. 685.

¹⁰³ Ebd., S. 687-688.

くは、赤軍撤退の際に逃亡した。残っていたのは約2000人。レヴァル（首都タリン）だけでおおよそ1000人であった。16歳以上の全男子の逮捕は「終わった」。彼らは、医者および特別コマンドが任命したユダヤ人長老会議は別として、特別コマンドの統制下に自衛団によって「処刑された」。労働能力のあるレヴァルとベルナウに住む16歳から60歳のユダヤ人女性は逮捕され、労働配置された¹⁰⁴。

【労働配置とゲットー化】

リトアニアとラトヴィアにおける最初はかなり大規模な処刑遂行の後すでに、ユダヤ人の「余すところのない除去」はすくなくとも現時点では実行できないことが明らかになったという。これらの地域では手工業の大部分がユダヤ人の手中にあった。たくさんの職業（特にガラス職人、ブリキ職人、暖炉取り付け職人、靴職人）がほとんどもっぱらユダヤ人によって行われていた。彼らは生活に必要な設備の修理や破壊された町の復興、そして戦争重要作業のために「目下は不可欠」だったからである。リトアニア人やラトヴィア人によってユダヤ人労働力を置き換えようとされたが、労働過程にあるユダヤ人のすべてを即座に交代させることは、特に大きな諸都市ではできなかった。それに対し、労働局と協力して、もはや労働不能となったユダヤ人の把握を行い、「小規模処刑」を行った。この関連で、ところにより、民政当局から「大規模な処刑」の遂行にはかなりの抵抗があったという。これに対しては、「根本的命令の遂行なのだ」と対応したのであった¹⁰⁵。

出動最初の日々、処刑措置の組織化と遂行とならんとすぐさまゲットーの創設に取り組んだ。特にカウエン（カウナス）では、総人口15万2400人中、ユダヤ人3万が住んでいたので、緊急を要した。ユダヤ人の委員会か

¹⁰⁴ Ebd., S. 688.

¹⁰⁵ Ebd., S. 688-689.

ら異議が唱えられたとき、これ以上のボグロムを防ぐためだと説明して納得させた。リガでは「モスクワ郊外」と称される地区をゲットーに割り当てた。そこはリガで最も劣悪な住宅地区であった。しかし、ユダヤ人のこの地区への割り当ては、かなり難しかった。そこにまだ住んでいたラトヴィア人をほかに移住させなければならず、リガの住居が非常に窮屈だったからである。リガに残っていた総数約2万8000人のうち、10月末日までに2万4000人をゲットーに入れた。他の諸都市でもまだかなりの数のユダヤ人が残っているところでは、ゲットーを設置した¹⁰⁶。

【パルチザン鎮圧作戦の実際】

最初の何週間かのうちにソヴィエトはパルチザン連隊を編成した。その任務は、ドイツ前線背後の陸軍後方地域奥深く、サボタージュを行わせ、考えるあらゆる仕方で襲撃やテロによる不穏状態をつくりだすことだった。ドイツ前線を突破した部隊の他に、残存していたコミュニストや潰走した赤軍兵士もパルチザングループを結成し、同じように行動した。さらにいろいろな場所でパルチザンが落下傘兵として投入された。治安警察の出動コマンドと国防軍によって肅清すべき地域の個々の場所を体系的にしらみつぶしに捜索を行い、そこで得られた経験から、パルチザンとの戦いは情報基盤があってこそ成果を上げられることが明らかとなった。情報網の構築だけでは不十分で、コマンドに割り当てられた通訳隊を民間偵察者として投入した。必要な限りで、国防軍部隊と一緒にかなり大きな作戦を展開した。そこで大量の経験を収集した¹⁰⁷。

【中間総括——ユダヤ人とコミュニストの関係】

以上、アインザッツグルッペAの詳しい報告書からどのような活動を行っ

¹⁰⁶ Ebd., S. 689-690.

¹⁰⁷ Ebd., S.690-691.

ていたかを抜粋的に見てきた。途中、Bの担当地域だった白ロシアもAの担当地域になったが、10月31日までの処刑数統計から担当地域全域の総括表を見ておこう¹⁰⁸。

アインザッツグルッペAの開戦から10月31日までの処刑数

	ユダヤ人	コミュニスト	計
リトアニア	80,311	860	81,171
ラトヴィア	30,025	1,843	31,868
エストニア	474	684	1,158
白ロシア	7,620	—	7,620
計	118,430	3,387	121,817

出所：L-180, Anlage8, IMG, Bd. 37, S. 702.

これにポグロムによって「除去されたユダヤ人」、5500人、旧ロシア地域で処刑されたユダヤ人、コミュニストおよびパルチザン2000人、精神病患者殺害748人¹⁰⁹を加えると、130065人。

これにさらに、開戦直後に国境地帯でティルジットの国家警察・保安部が抹殺したコミュニストとユダヤ人、5502人を加えると、総数は、135567人であった¹¹⁰。

【パルチザン鎮圧戦と現地住民大衆の対応】

開戦後2週間もたたない頃から、ドイツ前線から陸軍後方地域で走行中の自動車や小さな隊列への襲撃、鉄道線路、道路、橋に対する妨害行為、電報電話設備や貯蔵庫などの破壊が日々が増大した。こうした妨害行為の主謀者はドイツ前線の背後に投入された「赤のパルチザングループ」であった。その創出はスターリンが41年7月3日から7日にかけて毎日繰り返し

¹⁰⁸ Anlage 8. Übersicht über die Zahl der exekutierten Personen, Ebd., S.702.

¹⁰⁹ たくさんの精神病施設が、ソ連軍撤退のとき「すべての食糧在庫が奪われ」、監視人や介護人が「逃亡していた」ため、患者が「脱出して、治安のために危険になった」という理由付けであった。Ebd., S. 691.

¹¹⁰ Ebd., S. 703.

た演説で呼びかけ、要求していた¹¹¹。

パルチザンの活動は、ポーランドや西部での野戦におけるゲリラ兵とは比べられなかった。そこでは、扇動された民間人のほとんど準備のない、部分的には即席の活動が問題だったが、ソ連はパルチザングループと時間をかけて準備した組織を投入した。パルチザングループの編成はこの戦争の発明品ではなかった。むしろソ連の軍事文献はすでにかなり前からパルチザングループの組織と活動様式の価値を詳しく検討していた¹¹²。

最初はパルチザンの人数、組織、戦争様式がほとんどわからず、体系的な鎮圧作戦は困難で成果も乏しかった。襲撃と妨害行為の数は不断增加し、人的物的に重要ではないといえない損害を被った。また、ドイツ前線の背後で相当な不穏状態が引き起こされた。そこでパルチザン鎮圧に体系的に着手した。国防軍との密接な協力とパルチザン鎮圧作戦で集めた経験の交換が時の経過とともに、赤色パルチザンの成立、組織、人数、装備と活動様式についての正確な知識をもたらした。活動をパルチザン出没地域での戦いに限定することなく、防衛活動強化と治安警察の活動の特別の可能性を有効にした。すなわち、ロシア人投降者と戦時捕虜ならびに逮捕したパルチザンを綿密に取り調べ、資料を集めた¹¹³。

例えば、パルチザンの成立と組織に関しては、ロシア人戦時捕虜、投降兵、逮捕したパルチザンの証言から、ペテルスブルクで開戦以降、10のパルチザン連隊が編成された。ペテルスブルクの10の軍管区のそれぞれが、1000人から成る一連隊を編成せよとの命令を受けた。連隊は、それぞれ100人の大隊に分けられた。このパルチザン連隊への志願は自由意志であった。志願者の一部はソ連軍、一部はその他の義勇兵で、そのほとんどがコミュニストであり、労働者として軍需工場で働いていたものだった。特に志願者が多かったのはコムソモール（共産主義青年同盟）からであった。指導

¹¹¹ Ebd., S. 703.

¹¹² Ebd., S. 703-704.

¹¹³ Ebd., S. 704.

的地位は信頼できる коммуニストが占めていた。パルチザン部隊の第二の種類は、破壊されたロシア軍部隊のメンバーから結成された。打ち負かされた連隊の兵士は、彼らの司令官とコミッサールからパルチザングループと一緒に命令を受け取った。第三のパルチザン部隊は коммуニストと赤色コミッサールから編成された。彼らは、ドイツ軍の急進撃のためロシア前線の後方に逃げる可能性を持たなかった。彼らはまず住まいを立ち退いたあと、居住地近くの森に集まり、パルチザングループを編成したが、その人数は非常にさまざまであった。いろいろな場所でソヴィエトロシアの落下傘兵が把捉された。彼らもパルチザンとして投入されたのであった。この場合、一部は赤軍兵士であり、一部は落下傘兵に自由意志で志願した市民の家族であったが、一部は厳しい脅かしでこの部隊に入ったものであった。最後に、いわゆる破壊部隊があった。大きな諸都市、特に工業施設のある諸都市ではソヴィエトによりドイツ軍の進駐前に破壊大隊が作られた。その主要任務はドイツ落下傘兵との戦いであった。そのほかに彼らは赤軍が撤退の際に破壊できなかったすべてのものを破壊するものとされた¹¹⁴。

その装備と武器は隊編成の種類ごとに違っていた。たとえば、ペテルスブルクで編成されたパルチザン連隊の場合は、ソ連軍の完全なユニフォーム、ただし階級章なしであった。武器は小銃、部分的には約140発の弾薬を備えたモダンな半自動銃、それに2 - 3個の手榴弾とガソリン一缶。他方で制服などはなく、さまざまの民間人の服装ばかりの部隊もあった。そのような部隊の場合、武器もほとんどが古いもので、自動小銃や機関銃でもかつての戦闘から救い出されたものばかりであった¹¹⁵。

そうした装備劣悪状態でも、パルチザンの戦いは次第にドイツ（軍・治安関係者・治安状態）に対しての打撃力を強めていくことになる。ドイツ側の鎮圧作戦が「取るに足りない成果」しか上げられなかったのは、パルチザンが地理に詳しいことだけではなく、「特に旧ロシア地域で住民から

¹¹⁴ Ebd., S. 704-706.

¹¹⁵ Ebd., S. 706.

最強の支援を受けていた」からであった¹¹⁶。住民のバルチザン支援は、他方におけるドイツ軍へのあらゆる支援を厳罰で処罰するとのソ連側からの赤軍撤退に際しての脅かしの宣伝、その効果とのせめぎあいの中で見られたものであった。占領地域住民のそうしたバルチザン支援にくさびを打ち込み、抵抗勢力の分断を強化するためにも、ソ連指導部・バルチザン・コミュニストとユダヤ人の同一視のイデオロギーは機能を発揮し、前掲統計のようなユダヤ人殺戮の実際の拡大において、その大きな武器とされたことは明らかであろう¹¹⁷。

¹¹⁶ Ebd., S.708.

¹¹⁷ ソ連指導部は1991年にソ連のアルヒーフが開かれて以降の調査でユダヤ人迫害、大量殺害について情報をつかんでいたことが分かってきている。その情報源は主にNKVD情報提供者、ドイツ人戦時捕虜、ドイツの捕虜施設から逃亡した赤軍兵士、42年以降はバルチザングループからであった。Ebd., S.85. 以下若干の史料。ソ連の捕虜から逃げかえったドイツ兵士の報告。Bericht des Verbindungsoffiziers des AA beim AOK 18 vom 22. 8. 1941, Dok.63, VEJ, Bd.7, S.258-259. キエフ郊外バビヤールにおけるユダヤ人大量射殺に関して。ソ連スパイが情報資料として手に入れたことを示す手書きメモ付き報告書。Bericht (streng geheim) des Chefs der Politverwaltung der 18. Armee und des Leiters der 8. Abteilung der Politverwaltung der 18. Armee an den Chef der Politverwaltung der Südfront vom 15. 1. 1942, Dok.141, VEJ, Bd.7, S.415-419. ドイツ戦時捕虜から逃亡した2人のソ連将校のニコライエフとスターリノにおける1941年10月30日のユダヤ人大量射殺についての報告。Bericht des Instruktors der VII. Abt. Der Politverwaltung der 12. Armee an den Chef der VII. Abt. Der politischen Hauptverwaltung der roten Armee vom 30. 10. 1941, Dok.104, VEJ, Bd.7, S.335. イギリスの諜報部がユダヤ人殺戮の規模の大きさをすでに41年夏に知っており、チャーチルが41年晩夏、下院で「何千人も——文字通り何千人——の処刑が行われている」などと演説した。秩序警察の無線通信が傍受されていることを悟り、この後は大量殺戮の報告は文書携帯の急使で。Ebd., S.89. リチャード・ブライトマン『封印されたホロコースト——ローズヴェルト、チャーチルはどこまで知っていたか』（川上法一訳、石田勇治解説、大月書店、2000）。

むすびにかえて

いまや、許容枚数に達した。ソ連の短期征服の野望が挫折した後、1941年10月から12月のソ連における軍事情勢・治安情勢の変化に対応してどんな事態が発生するか、第三帝国のソ連での苦境がドイツ占領下のポーランドとヨーロッパにおいてどんなことを引き起こしたか、これは拙著(1994, 2001, 2003)でも検討したことだが¹¹⁸、新史料集で再検証していくのは、別稿に委ねることにしたい。

(投稿：2020年12月25日)

¹¹⁸ 特に拙著(2003)、第4、5、6章。なお、この後も次のような拙稿で検証は続けてきた。「独ソ戦の現場とホロコーストの展開」『横浜市立大学論叢』社会科学系列、50-2・3、2000。「ホロコーストの論理と力学——総力戦敗退過程の弁証法——」同、55-3、2004。「総力戦とプロテクトラートの「ユダヤ人問題」」同、人文科学系列、56-3、2005(実際の刊行は2006)、「特殊自動車とは何か——移動型ガス室の史料紹介——」同、社会科学系列、56-3、2007。「アウシュヴィッツへの道——「過去の克服」の世界史的到達点の地平から——」(1)同、人文科学系列、58-1・2、2007。同(2)、同、社会科学系列、58-1・2・3、2008。同(3)、同、人文社会科学系列、59-1・2、2009。「ホロコーストの力学と原爆開発」横井勝彦・小野塚知二編『軍拡と武器移転の世界史』(日本経済評論社、2012)、第8章。第三帝国の原爆開発挫折も含め、総力戦敗退過程の人的物的な資源の逼迫状況こそは、ナチ国家指導部がホロコーストを推進するヴェクトル群と重なっていた。「1942年ドイツ軍需経済の課題とシュペーア —ナチス原爆開発挫折の要因分析のために—」『横浜市立大学論叢』人文科学系列、65-1。

付図

図1. 独ソ不可侵・電撃戦期の独ソ勢力圏分割線1939. 8～1940. 6



出所：dtv-Atlas, Weltgeschichte, München 2006, S. 476

図2. 第三帝国のソ連占領地域1941. 6～1944



永岑『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文館, 1994, 図0-1

出所：Die seitwellig okkupierten Gebiete der UdSSR 1941-1944, in : Europa unter Hakenkreuz (Sauptkanen), S. 613.